

---

# 【ロマサガ2二次創作】 伝えられる物語

藤沢みや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ロマサガ2二次創作】 伝えられる物語

### 【Nコード】

N4864K

### 【作者名】

藤沢みや

### 【あらすじ】

伝承法の生んだ最強の皇帝。バレンヌ帝国皇帝には至上の使命があった。それは、過去に英雄と呼ばれたモンスター『七英雄』を倒すこと。

技を術を記憶を伝える伝承法も千年以上の時を経て、効力が薄れた。最後の皇帝は一六歳の少女ミリア。彼女は仲間の力を借りて最終皇帝として決戦の場に臨むこととなる

(この作品はロマンスング サ・ガ2の二次創作です。 完結)

## 1：物語の始まり（前書き）

ロマンシング サ・ガ2

1993年発売のRPGゲームです。（スーパーファミコン）  
フリーシナリオというシステムと自分で歴史を作成できるということ  
ことで一部のファンに有名な作品です。

思い入れのある、そして育てたキャラクターが年代ジャンプで突  
然世代交代したり、バグが多いなどでも好みの分かれるゲームでも  
ありました。

フリーシナリオということでキャラクター造形は名前や性別、職  
業程度で、性格がほぼわからないというのもこの作品の特徴かもし  
れません。

プレイヤーが選択できるのは最終皇帝が男性か女性かということ  
だけ。ゲームとしての自由度が高過ぎるために歴史そのものを主人  
公として捉えるとしてもはまる作品です。

詳しくはぜひ「ロマンシング サ・ガ2」で検索してお調べ下さ  
い。

## 1：物語の始まり

物語は、吟遊詩人の豎琴の音色から始まる。

遠い遠い過去、七英雄と呼ばれた伝説の英雄たちの存在。

彼らは、その時世界を支配していた長命種の古代人たちを、その圧倒的な戦闘力で守護し続けていた。長いモンスターたちとの戦いに終止符が打たれ、世界は平和を取り戻す。

しかし、七英雄は姿を消した。

いつか、また世界が混沌に満ちたら【彼ら七英雄は戻ってきて、再び世界を救う】という伝説だけを残して。

彼らが消えた謎は解明されぬまま、長い歴史の中で長命種の古代人は天変地異でいなくなり、古代人の奴隷として生きていた短命種、現代人が世界を支配していた。

数多の国に別れ、世界は東の間の安寧を得る。

けれど、その平和は破られ、活発化したモンスターにより再び脅威に晒されるようになってしまった。

どうか、再び七英雄よ、世界を救いたまえ。

人々に渴望されて、継られ、現れた伝説の七英雄

古代の『

英雄』は、呼称とは裏腹にただの凶悪な七匹のモンスターと変貌していた。

舞台は小国、バレンヌ帝国。

世界をモンスターから、七英雄の脅威から救うため、バレンヌ帝国の時代を超えた長い戦いが始まる。

戦いの始まりはレオン皇帝まで遡る。

厳しくも優しい皇帝レオン。彼の力は謎の女魔道士オアイーブにより息子のジェラルムへ。

そして次の皇帝へと伝承されることになった。  
自らの魔法・記憶・剣技などを次世代に伝える『伝承法』が効力を失うまでに人々は英雄と呼ばれたモンスターを倒すことができるのか。

時間と歴史と世界、過去の英雄との戦いが幕を開ける。

レオン皇帝、ジェラール皇帝の時代から千年以上の時は過ぎ、七英雄は最後の一人となった。

残った七英雄の名はノエル。

そして、バレンヌ帝国の皇帝も最後の一人となる

そう、伝承法は効力に期限のある術法なのだ。

吟遊詩人は豎琴の音色を途切れさせた。

高い澄んだ一音。

その音をきっかけに、最終皇帝の物語に入った。

語り始めはバレンヌ帝国首都のある宿屋。

一人の少女に光が降り注ぐところからである。

## 1：物語の始まり（後書き）

すぐく昔に書いたのですが、自分でも気に入っていた物語なので二次創作として投稿いたします。

創作として改変に挑戦をしたのですが、もういじれないほどゲーム設定に惚れ込んでいたものですからできませんでした。

機会があれば名作（迷作？）ですので、ぜひプレイしてみてくださいませ。

2：もう、大丈夫 - 1 - (前書き)

このお話はロマンスिंग サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

気が付くとミリアは光の中にいた。

目に突き刺すような強烈な光ではなく、優しく包み込むような温かい光の中に。

(ここは ?)

周りを見回しても見えるのは虹の光、清冽な白だけである。

たった今までバレン又帝国首都アバロンの皇帝居城近くの宿、満月亭の二階の客室にいたはずなのに、これはいったいどうしたことなのだろう。

やや寝ぼけていた思考が覚めると、慌ててミリアは立ち上がった。キヨロキヨロとまた周りを見渡す。だが、いくら目を凝らしても他の人間や、動物、植物、毎日眺めていた透けるような蒼い空も天を覆っているかの様な夜空のベールもミリアの周りには見当たらなかった。

今まで経験したことのない、突然のできごとにミリアは軽い眩暈を感じる。

このまま、たった独りこの空白の世界で生きなければならぬのか。

誰とも喋ることなく笑うことなく、たった独りきり

急に顔面から血の気がひいた。

なぜ？

なぜ、急にこんなところにわたしは飛ばされたのだろう。いくら考えたところで理由が思い浮かばない。

これといって魔法使いに恨まれるようなことはしていない筈だし、封印されるような巨大な力や魔力を持っている訳ではない。

訳がわからなかった。

「す すみませーん。誰かいませんかー」

ミリアはおずおずと呼びかけて見る。

その時、遠くで鈴のような音が聞こえた。

シャラン

シャラン      シャラン      シャラン

鈴の音が大きくなるとともにミリアの前に      ぼんやりと人影が現れる。

淡い董色のドレスに白に近い空色のベールを身に纏い、ジャスミンイエローの長い髪をなびかせている女性であった。

年は若いとは言いが落ち着いた大人の女性にしか所有できない、しつとりとした美しさを持つ女性である。

(ミリアフアラ      聞こえますか?)

(はい!)

ミリアは反射的に返事をしていた。

(あなたには自らの人生を捨てて戦う決意がありますか?)

(は?)

突然の、突拍子もない問いかけにミリアはつい変な声を上げてしまった。

(私はバレンヌ皇帝マグノリア)

バレンヌ皇帝?

あの、かつてないほどの勢いで世界各地を統一していると伝承法の生んだ最強の英雄?

目を見張りつつ彼女の頭上を見るとそこには黄金色の帝冠が光り輝いていた。

(あなたに      戦う意志があるのなら、私のこの力をあなたに伝えましょう)

マグノリアのミリアを見つめる瞳は真摯なものであった。

彼女の瞳を見つめていたら六年前のことが急に思い出された。

荒れ狂う炎。女子供の叫び声、泣き声。

小さな集落は荒くれ男の集団によってたった一夜によって滅ぼされた。

わたしの父と母も 盗賊に殺された。

十歳のわたしには何も出来ることが無く、母に押し込まれた地下室の中で、二人が殺される間ただ一人震えているしかなかった。

力があれば！

思い出す度に思ったことだ。

わたしに力があれば、魔法でも剣技でも何でもいい、戦う力があれば父さんも母さんも死なずに済んだのに！

（お願いします。わたしに力を！）

拳を握りミアはマグノリアに懇願した。

真摯な二人の瞳が見つめあう。

（わかりました）

マグノリアが破顔する。

満ちたりたような、安心したような微笑みを浮かべ、自分の頭上に輝く黄金の帝冠を外した。

ミアは自然にマグノリアの前に片膝を付いていた。

ゆっくりと帝冠がミアの頭に置かれる。

力が満ちてくる。

身体の隅から隅まで、指の先、髪の手先まで水が染み込む様に身体に力が行き渡る。

頭の中を光がよぎった。

流星群の様に記憶が脳に流れ込む。

忘れていたことを、次々と思いついていくかの様に記憶が増えていく。レオンの記憶、ジェラルルの記憶、バジャーの記憶、モニカの記憶

そして、その各代の皇帝達の記憶は自らの結末、死をも覚えていた。

熱風にさらされ息絶えた者。

敵の剣技になす術も無く無残に切り殺された者。

何も知らずに悪業に手を貸し取り返しのつかないことをして退位した者

たくさんの皇帝達の無念、失意、そして死の痛みがミリアの身体を駆けめぐる。

(あ う、ああっ)

マグノリアの姿とともに、ミリアの意識は消えた

3・もう、大丈夫 - 2 - (前書き)

このお話はロマンスिंग サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

(あー、もうっ！イヤになっちゃう！)

ミリアは肩を怒らせて、ズカズカと廊下を歩いていた。

皇帝継承後、満月亭にはアバロン城からの使者が来ていた。新皇帝であるミリアを迎えるために。

予定通りに、フリーファイター見習いとしてアバロン城に行ったら、顔を見ることも出来ないような大臣や先帝マグノリアの戦友達が目の前で恭しく跪いているのだ。

これは不思議な感覚であった。

目の前にいる人達がどんな人だということは記憶にあるし、今までどんなことがあったかも覚えていたのだが、実感が湧かない。

例えて言うのならば、読んだことのある物語の登場人物がいきなり目の前に現れたかのような、奇妙な感覚なのである。

「どうぞ、アバロン城にお越し下さい」

そう言われ、城に行っただがすることは今まで何度もやったことのある(と思う)皇帝継承の儀式や、何度も聞かされたことのある(と思う)皇帝としての心得の拝聴なのだ。

しかも、皇帝継承の儀式の後に現れた女魔導士オアイブに自分が最後の伝承法を受け継ぐ皇帝だと知らされた。そのために、会う人、会う人に自分も最後の戦いに連れて行ってくれとせがまれるし、たまったものじゃない。

意識的にはまだ自分は最終皇帝では無く、ミリアファアラ・トラガなのだ。

まだ十六年しか生きていない小娘で(記憶だけで言えば十分すぎるほど大人だけれど)　　ってもうババアかも　　(一国を背負えるほどの能力はミリア自身には無いのである。

ずんずんと歩いていくと、柱から急に現れた人物がいる。その人物とミリアは正面衝突してしまった。

ぶつかった相手の腕の中から、ひとつのガラス瓶が落ちる。

割れる！

そう思い目をつぶった瞬間、相手の口元から呪文が囁かれた。

恐る恐る目を開ける。

「大丈夫ですか？ 陛下」

ぶつかった相手である宮廷魔術師の男性がそう問いかけてきた。

足下に割れた瓶は見当たらない。

「クイツクタイムですよ。私みたいな、そそっかしい者にはこの呪文は大助かりです」

彼は気恥ずかしそうにそう言うと、弱々しく微笑んだ。

クイツク・タイムは水の最高術で、自らの時流を早めて敵の攻撃を必ず後にする術法である。消費するマジックポイントは大きく、どれだけ鍛錬した魔術師でも一日で使えるのは、薬で補わない限り三、四回が限度である。

その大術を彼はさらりと唱えたのだ。

「いくら呪文が使えても、判断力と反射神経が優れていなかったら何の役にも立たないわ。とっさに呪文が唱えられるって魔術師として欠かせない才能だと思う！」

あまりの彼の自信無さそうな口調に、つい自分の記憶も重なってミリアは大きな声で断言してしまった。

村の孤児院で、ほんの少し基礎の魔法を教えられた。だが、いつも肝心な時に限って呪文を唱えることがミリアには出来なかった。

彼は一瞬びつくりしたような表情をした後、さっきの自信無さそうな微笑みではなく、嬉しそうな微笑みを浮かべた。

優しい微笑みに先帝マグノリアの浮かべた微笑みが重なる。

（あなたには自らの人生を捨てて戦う決意はありますか？）

マグノリア　わたしはあなたが望んでいるような皇帝にはなれないかもしれない

「陛下？ どうしましたか」

心配そうな面持ちの宮廷魔術師がミリアの顔を覗き込む。いきなり目の前に深いバントシェンナ色の瞳があったのでミリアはどぎまぎしてしまった。

「そ、その腕の中の大量の瓶は何？ え、えーと」  
「思えば名前を聞いていなかった。」

「ジェミニ、です。これはですね、『情熱の香水』を大量生産出来る様に分析している時に出来た液体や、分解させるための薬です」  
「片付けているってことは成功したの？」

ジェミニはミリアの問いに、嬉しそうにまた微笑む。

「はい。後は材料さえ揃えばいくらでも作れますよ」

「ちょっと待って」

ミリアは考えるように人差し指を眉間の間に当てるとつぶやいた。  
「あなた宮廷魔術師よね？ なんてそんな科学者みたいなことしてるわけ？」

「風と水の術法は、もう最高技が完成しているのですが、だからといって遊んでいるわけにはいきませんからね。こうやって道具の分析をしているんですよ」

「ふーん。でも、どうして最高技ってわかるの？ やってみなければわからないわよ」

ジェミニは少し困ったように笑ったかと思うと、急に真面目な顔を作った。

「私達の力では、これ以上の力を精霊達から借りることは出来ないのです。それは例え陛下でも変わりありません。大きすぎる力は世界のバランスを崩します。今以上の力は我々人間には制御することが出来ないのです」

「そっか。そういえば、そうやって技の開発を打ち切ったのはマグノリアだったわね。自分で言ったことを忘れるなんて」

ミリアは苦笑したが、目の前のジェミニは笑ってはいなかった。

「どうかした？」

「あなたは、マグノリア陛下ではありませんよ。あなたはあなたです」

はっきりした物言いにミリアはドキリとした。

まるで最近継承した記憶のせいで混乱しかけているのを見透かされたようだ。

「はい」

そういえば、ジェミニはわたしに会っても最終決戦に連れて行ってくれとは言わない。

言われたら言われたでなんだか腹が立つが、言われなとなると却って気になるといふのは何だろう　乙女心は複雑である。

「何だかお疲れみたいです」

「うん」

ミリアは素直にうなづく。

「みんな、わたしに会うと『最終決戦に連れて行ってくれ』ていうか『あーしろ、こーしろ』ってお小言いつかどっちなかのよ」

「お茶でも飲みませんか？」

「は？」

「トバの美味しいお茶が手に入ったんです。あ、あとガーネットから貰ったクッキーもあるんですけど　いやですか？」

ジェミニは顔を赤くしている。

「ううん。ごちそうになりたい」

ミリアはふるりと顔を振ると力なく答えた。

そのミリアを見て、ジェミニと名乗った茜色の髪の宮廷魔術師は静かに微笑した。

4：もう、大丈夫 - 3 - (前書き)

このお話はロマンスिंग サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

アバロン城一階の奥にある宮廷魔術師の詰め所には、大きな暖炉がある。

ミリアはジェミニに招待されて、その部屋の中にいた。扉はわずかに開かれている。

未婚の男女が二人で室内にいるのはよくない噂の元になるとは、ジェミニの言。

その言葉どおり、同僚になるガーネットと二人きりになる時も扉は開け放つという。

実際には、あまり二人きりになるということもないそうだが。次代を担う宮廷魔術師の卵たちが頻繁に出入りするため、人数が三人以下になることは少ないらしい。

「紅茶は、沸騰しているお湯を使ったほうが美味しく煎れられるんですよ」

暖炉の前のカーペットに座って、ジェミニが解説をしながらお茶を淹れてくれる。

「丸い形のポットのほうが茶葉の対流、ジャンピングが起きやすくてさらに美味しくなります」

ジャンピングは約三分で終わるから、その時が茶葉の持ち味がすべて溶け出ていて一番美味しく飲めるなどなど。ジェミニは、聞いてもないのに詳しく紅茶の説明をしてくれた。

「美味しい」

ジェミニが入れてくれたお茶は、本当に美味しかった。

冷えた心の中まで温めてくれるような、そんな優しい味がする。

「また疲れたり、嫌なことがあったらいつでもお茶を飲みに来て下さい」

目の前の青年はゆったりと微笑む。

やわらかな木立の色の瞳。

夕日色の髪の毛。

「わたし、疲れてなんていないわ」

ミリアは答えて、首をゆるりと振る。

「体は疲れていなくても心は疲れているのではありませんか？」  
心が疲れている？

ジェミニの問いに首を傾げた。

「千年近くの記憶を一気に継いだのです。自分では平気なつもりでも、本当はかなり参っているはずですよ」

その言葉に一瞬、目を閉じて、そして開く。

「そうかもしれない」

ミリアはカップの中の琥珀色の液体を見つめた。

「みんな真剣に世界を守りたくて、危険を承知で随兵に立候補してくれているのに、それをわかっているはずなのに、うっとうしいって思ってしまうの」

ジェミニは何も言わずに、彼女の言葉に耳を傾けている。

「大量の記憶のせいで混乱しかけていたし　　こんな心の弱い皇帝じゃ、みんなもいい迷惑よね　　」

大国バレンヌの皇帝がこんな心弱くてどうするの。

そう、思うけれど千年の記憶というのは凄まじい。

今でも頭の奥に痺れのようなものが残っている気がする。

ミリアはきゅっと唇を噛み締めた。

そして、顔を上げてジェミニを見据える。

「ごめんなさい。初対面のあなたにこんな愚痴みたいなことを言うてしまった　　冗談だから気にしないで　　」

冗談として、受け取って欲しい。

こんな弱い皇帝であってはいけない。

「弱くてもいいのではないですか？」

優しい囁きの、とんでもない言葉にミリアは瞳を瞬かせた。

「弱いからこそできることもあります。弱気な態度や言動も見方を換えれば、慎重な態度に冷静な言動と言える」

「へ 屁理屈じゃない」

呆れ返ったミリアの言葉に、ジェミニは優しく微笑んだ。

「屁理屈で良いんですよ」

「でも屁理屈ばかり言っていたら、みんなついてこなくなっちゃうわ」

「そんな輩は随従を申し出などしませんよ」

さらりとした返答に絶句する。

「案外、強気なのね」

「強気な弱気でちょうどいいんです。自分の気持ちなど、言わなければ相手には伝わりません」

ミリアは絶句するしかなかった。

優しい姿や気の弱そうな喋り方をするのに、なんてこの人はしたたかなんだろう。でも彼の言っていることは真実だ。

しばらくの沈黙の後、またミリアは口を開いた。

「やっぱり疲れているのかも  
なんとなくわかる。」

この人は、言外に愚痴つてもいいのだと言ってくれているのだ。弱さは悪ではないのだ。いつも強くなくてもいいのだ。

「もう一杯いかがですか？」

「あ、ください」

つい口調がぞんざいになる。

「お茶は昔、薬として用いられていたんですよ」

「そうなの？」

「今でも『心に効く飲み物』だといわれているんです」

お代わりを注いだカップを手渡しながら、ジェミニはそう言った。お茶に誘ったのは下心があったわけではなく、わたしの疲れをただ癒そうとしてくれただけなのだ。優しいな微笑みを見つめながらぼんやりとそう思った。

下心なんて、ものすごーくこの人に失礼だけど。

ミリアは口元に笑みをのせた。

嬉しい。

素直にそう思う。

皇帝を継承した後に出会った人はみんなわたしを英雄扱いして、こんなふうには優しくしてはくれなかった。

一口、お茶を飲む。

温かい。

こうしてお茶を飲んで落ち着いたら、何であんな些細なことでもしていただのか返ってわからなくなってしまった。

単純だなあ。

「またお茶飲みに来てもいい？」

「ええ、いつでもどうぞ」

もし、また心が疲れてしまっても、この人の微笑みとお茶があればまた元気になれるかな

「もう大丈夫ですね」

「うん」

カップの中の琥珀色のお茶を見つめながら、わたしは茜色の髪の毛の魔術師に出会えたことを神に感謝したい気持ちになった。

もう、大丈夫。

5・名前を呼ぶ声、あたたかな手のひら - 1 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

新皇帝、そして最終皇帝となったミリアは間を置くことなく随兵を選んで戦闘に出生した。

バレンヌ帝国は皇帝不在の帝国だ。

一年のうちのほとんどを皇帝は戦闘で過ごし、各国を巡っている。それでも帝政が保たれているのは、各国の元代表たちが皇帝へ恭順しているからである。

『七英雄』という共通の敵がいるから、世界はまとまっている。想像もつかないほど巨大で凶悪な『敵』の存在。

それが、バレンヌ帝国が世界統一を推し進めることができる根源。

ミリアが選んだ随兵はすべて女性である。

最終皇帝であるミリア。

帝国軽装歩兵のジェシカ。

フリーファイターのアンドロメケ。

元カンバーランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダーのソフィア。

サラマットに住む女戦士、アマゾネスのテオドラ。

女性ばかりなのは、仕方がない。

数代前の皇帝の時に、ロックブーケの魅了術、テンプテーションの回避技を習得できなかったからだ。装備である程度の回避はできるし、最後に残された七英雄は男であるノエルのため心配は要らないかもしれない。しかし、なぜ彼らは『七英雄』と呼ばれるのか、ノエルの妹はロックブーケである事実、皇帝継承と共に強くなるモンスターたちを鑑みるとどうしても、最善の選択をするしかない。

そのため、バレンヌ帝国ではロックブーケの存在が明らかになっ

たところから随兵はほぼ女性だけになっていた。

メンバーを決め、ルドン高原で陣形や武器、防具の調整をしながら戦っている頃に首都アバロンから伝令が届く。

かつて滅ぼしたクジンシーが復活したという知らせ。

この五人のメンバーを選んだ直後の復活。

ミリアたちは再度封印の地へ赴き、さらに進化し強くなっていたクジンシーを辛くも撃退した。

死したはずの七英雄の復活。

嫌な予感にミリアは背筋を震わす。

クジンシーが復活したのであれば、それ以外の七英雄も復活するのだろうか？

ただ、復活するだけ？ 今回のように進化を遂げるのか  
想像すればするほど、悪寒がする。

恐ろしい。

ミリアは久々に帰郷した首都アバロンで、束の間の休息を満喫していた。

夜中に寝室を抜け出す。清かな色の石造りの寝室は豪奢で返って落ち着かない。

空を見上げると、星が輝いている。

ミリアは中庭を一人で歩きながら、ポーツと上を見上げていた。

大臣達から一人での行動は慎むように言われていたが、四六時中、誰かに見られているのは気が滅入ってしまう。今のところ平和なアバロンに居る時くらい一人で散歩したい。

ミリアは開発室に向かう階段の半ばに腰かけて、相変わらず空を見上げていた。

開発室に続くあたりは背後が深く広やかな森のせい、空気が澄んでいて星がたくさん見える。

しばらく一人で頭上を見上げていたが、不意に気配を感じて視線を下に向けた。

馬小屋の方向から一つ、ぼんやりとした明かりがこちらに向かってゆっくり流れてくる。

「星空観察ですか？ 陛下」

明かりの主はジェミニだった。彼は片手にカンテラもう片方の手には数冊の本を持っている。

「こんな時間まで、研究？」

「はい、もうじき土の最高術が完成するんですが、どうしても安定が悪くて 他 of 魔術師長達と実験をしているんです。隣いいですか？」

「うん」

ジェミニは階段を上りミリアの隣に腰かけると、ゆっくりと伸びをした。それから首を回す。

その様子に口元を綻ばせる。

「肩揉んであげようか？」

「そうですね、じゃあ揉んでもらいましょうか」

ミリアの言葉に怒るでもなく、ジェミニは自分の背中をミリアに向けた。

「普通、それ程歳をとってはいないって言われちゃうんだけど

」

ミリアは苦笑しながら、ジェミニの肩を優しく揉みだした。

意外と肩幅が広い。

いつもジェミニは優しい笑顔でのんびりとしているから、細かいイメージがあるけれど、やはり男の人なのだ。

ジェミニはバントシエンナ色の瞳に茜色の髪をした青年だ。年齢は二十七歳。ミリアとは十一歳も年が離れている。だが、いつも穏やかでゆったりとしているせいか、もっと年を取っているように見えてしまう。見た目は幼い印象があるのに、雰囲気というのは大事だ。

「お客さん、意外と凝ってますね」

ミリアは少しずつ力を加えて、ゆつくりとジェミニの肩を揉んだ。「上手いものですね。ん〜、気持ちいいです」

ミリアの口調がぞんざいになるせいか、彼からの言葉もけっこうぞんざいだ。かしこまった口調をスラスラ用いることができるはずなのに、愚痴っていていいですよ、という態度どおり話しやすい口調を保ってくれる。

これは二人きりの時だけ。

意見具申の時などは、まるで別人か？ というくらい礼儀の伴った家臣の姿を見せる。

ここまで使い分けできるのはある意味、凄い。

「肩こりはね、首の凝りからもきたりするんだよ」

ミリアは得意気に説明を始める。

肩こりについては孤児院にいた頃、老修道女に詳しく教えられたのだ。その老修道女の肩こりは本当に酷くて、ミリアは、あつという間に肩もみのエキスパートになっていた。

「あと暇な時にね、ここのツボをぐって何度も押しおくと、予防になるんだよ」

ミリアはジェミニの左手を取ると、親指と人差し指の骨が繋がっているところを力強く押した。

「った!!」

ジェミニが情けない声をあげる。それにミリアは声をあげて笑った。

「たたた　　詳しいですね」

妙に感心したようなジェミニ口調に、ミリアは照れたような笑みを返した。

やっぱり手も大きい。

少し骨張っていて、指がすごく長い。ミリアの手は普通の女性の手と比べると少し指が短いから、ジェミニのような指の長いすらりとした手は羨ましかった。

「小っちゃい手ですね。ほら、一関節分も小さい」

まるで子供のように、彼は楽しそうに手のひらどうしを合わせた。ジェミニの言葉通り、二人の手の大きさは歴然だった。

「武器とか持ちづらいから、もう少し手が大きくなるといいんだけど」

「そうですか？ 可愛くていいと思いますけど」

にこやかにそんな風に言われてしまうと、返す言葉がない。ミアはあまり言われ慣れていない言葉だけに、ただ赤面をすることしか出来なかった。

「ありがとうございます、陛下。だいぶ楽になりましたよ。それじゃ、お部屋までお送りしましょうか？」

なんだか『陛下』と呼ばれた時、すごく嫌な感じがした。

他の人に呼ばれてもそんなに違和感を感じたりしなかったのに、なぜ急にそんな風を感じてしまったんだろう。

ジェミニの前『陛下』と呼ばれた時、自分はどう感じた？

思い出そうとしても、思い出せなかった。

最初の時は千年の記憶を一気に継承したことから混乱しかけていて、自分の呼称などに気に留めることすらなかったのだから。その後のお茶会はただ話ができるのが嬉しくてあまり気にもならなかった。なぜ今、急に気になったのだろう。

わからない。だけど、嫌。

「ねえ、一つお願いがあるんだけどいい？」

「なんですか？」

ジェミニは首を少し傾けた。

「出来たら、名前で呼んで」

「構いませんよ」

すぐくあっさりした返答にミアはびっくりしてしまった。

普通、そんな恐れ多いと言つものじゃないのだろうか。って、私はそんな恐れ入られるような人間じゃないけれど、身分上、立場上、だいたいの人がそう言つのに

「一人くらい名前を呼んでくれる人がいないと、おかしくなってしまうからね」

少ししんみりとした物言いに、ミアはこの人も昔自分の名前を呼んでくれる人を探していた時があったんじゃないかと思った。だから、あっさりと自分が大臣達に咎められるような願いも、受け入れてくれるのだ。

新皇帝、最終皇帝としてではなく、ミアファアラ・トラガという一人の少女を、この人だったら見てくれるかもしれない。

「ありがとう」

「どう、お呼びしましょうか？」

「ミア」

「ミア」

優しい呼びかけに、答えようとしたが声が出なかった。涙が溢れ、声は返事ではなく嗚咽としてミアの唇から洩れた。

「ミア」

大きな手がミアの頭を撫でる。ゆっくりと髪の毛を梳くように撫でていた。

「うう、うん」

「よしよし」

まるで小さな子を宥めるような口調に、自分は子供じゃないと抗議をしたかったが、こんな風に彼の前で大泣きしている以上、そんなことは言えなかった。

彼の手は春の陽射しのようにあたたかかった。

6：名前を呼ぶ声、あたたかな手のひら - 2 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

大泣きを終えて、しゃくりあげながら隣を見るとジエミニが困ったように微笑んでいた。

「女の子が泣いているのを見るのって、こんなにも居た堪れないものなんですね」

「えっ えぐっ」

「ごめんなさいとか、ありがとうとか、なにかを伝えたいのに、言葉にできない。

家族が亡くなった時もこんなふうに泣かなかった気がする。どうして？

ミリアは首を傾げる。

目の前のバントシエンナ色の瞳が優しく瞬いた。

ミリアは瞠目する。

わかった。

泣いている時に、傍に自分の味方になってくれるとわかっている人が、いるかいないかの差だ。

ジエミニはミリアの味方になってくれる。

そつ口に出して言われたわけじゃないけれど、なんとなくそうわかる。

だから、安心して泣ける。

弱い部分を見せることができる。

「可愛い顔が台無しですよ」

ジエミニがハンカチを取り出して渡してくれた。

「え、う、あ、ありがとう」

差し出されたハンカチを受け取ってミリアは目の上にあてた。

そのハンカチは、やわらかな香草の香りがする。

ジエミニはその属性どおり、風と水と天の気配に満ちている。一緒にいると落ち着く。

「やはり、その言葉のが嬉しいです」

「え？」

「泣いたことを謝るのではなく、ありがとと感謝されたほうが私も嬉しいです」

ジェミニは夜空を見上げて呟いた。

「泣けないようになってしまふことのほうが恐ろしい。ミリアの中には千年の記憶がある。欲されているのはその記憶のほうでしょう。ですが、あなたの身体はミリアのもの。記憶があなたの身体を操ることはできません」

そう、欲されているのは皇帝の記憶。

わたし、ミアアファールが必要なわけじゃない。

「だからこそ、あなたは、ミリアと皇帝を使い分けて精神の均衡を保たなければいけません」

使い分ける。

「随兵の仲間は、あなたのことをミリアだと思っているのでしょうか？」

ジェミニとミリアは、ミリアの予定を無理矢理開けて、宮廷魔術師の控え室でお茶会を催していた。彼が聞いたがるのは随兵の四人とミリアとのやり取り。全員ミリアよりも年上で、中には地区の長を勤めていた者もあり、まるで妹のように可愛がられ大事にされている。

「みんな、陛下って呼ぶけどね」

ミリアの呟きに、ジェミニは苦笑を返す。

「呼称が大事ではないと、本当はわかっているではありませんか？」

「」

本当に侮れない。

わかっている。

彼女らが自分を「ミリア」として見てくれていることはだけど。

「確かにわかってる。でもね、今この世界でわたしのことをミリアと呼んでくれるのはジェミニしかないの」

「ミリア」

「わたしは皇帝になれてよかったって本当に思ってる。最後の皇帝というのは不安だけど、わたしは、わたしの力でみんなを守ることができる。これって本当に凄いことだと思う。だけど、これは皇帝の力なの。わたしの力って言ったけど皇帝となったわたしの力で、ミリア個人の力じゃない。その違いくらいはわかってる」

そう、自惚れちゃいけない。

わたしが、今、ここで、認められているのはミリアの力じゃない。マグノリアからもらった、引き継がれてきた皇帝の力のおかげ。

ミリアの言葉を聞いて、ジェミニは真顔になった。

「失礼しました。私はあなたのことを知らぬうちに見損なっていたようです。あなたは　ミリアはしっかりしている。マグノリア陛下があなたを『皇帝』として選ぶはずです。ミリアの素質があるからこそ、あなたは今皇帝になっている。そこを間違えるところでした。許してください」

ジェミニの謝罪にミリアは瞳を瞬かせた。

わたしの素質があるからこそ、わたしは皇帝になっている？

「許すなんて、そんな必要ないよ。ジェミニは『ミリア』を心配してくれていたんでしょ？」

ふるふると首を振る。

わたしを、心配してくれる人がいる。嬉しい。

「ありがとうございます。では、ミリア、お送りしましょう。心配性な私としては可愛い女の子が夜中に一人でふらふらしているのを見過ごすことはできません」

ジェミニが立ち上がってカンテラを手にした。あたたかな光が揺れる。

反対の手にした本は魔術の本ばかりだ。

「心配性なの？」

見上げるとジェミニは苦笑を返してくれる。

この人の顔には、笑みばかりが浮かんでいる。

それって、疲れないのかな？

「ええ。心配性です。なにかを考える時にはまず先に失敗した場合を想定して考えてしまうくらい、心配性ですよ」

冗談めかして言うけれど、それってかなり後ろ向きな思考。

だけど。

「心配性は、ひっくり返せば深慮遠謀。になるのかしら？」

意地悪く問いかけてみれば、彼はふつと力を抜いた笑顔を見せてくれた。

「そうですね」

「じゃあ、最終皇帝が七英雄を倒せなかったら？」

ずつと、気になっていたらけれど、誰にも、どんな人にも聞けない質問を唇に乗せた。

ジェミニは、ずつと浮かべていた笑みをすつと引いて、真っ直ぐに見返してくる。

笑顔のない、彼の顔は 氷の遺跡の風よりも冷たく感じた。

「必ず倒せますよと言って欲しいのですか？ それとも自信を持ってくださいと励まして欲しいのですか？」

凍てついた視線と口調に寒気がする。

「 愚痴っていいって言ったくせに」

つつい唇が尖る。むうつとしてしまう。

この人、笑顔という包み紙で包んでいるけれど、中味はとっても辛辣で容赦がない。

「強気の弱気でちょうどいいと言ったのですよ」

「今の発言は弱気なだけってこと？」

「ご名答」

にっこりと笑みが浮かぶ。

ああ、わかった。

この人は、頑張っている人には優しくしてくれるんだ。

ただ、優しいだけじゃない。

与えてくれるだけじゃないんだ。

「じゃあ、頑張っても七英雄を倒せなかったら？」

顔を上げて正面から見据える。

ジェミニは口元に薄い笑みを浮かべると、カンテラを天に掲げるように持つ。

「わかっているのでしょうか？ 世界は荒廃の道を辿ります。どれだけ我が国の精鋭が鍛えようととも相手の成長速度が尋常じゃない。弱者は強者に頭を垂れるしかありません。あなたには後はないんです。はつきりとした断言にミリアは眉を顰めた。

「そうやって、わたしを追い詰めて、わたしがやる気をなくしたらどうするつもりなの？」

「そんなに弱くないでしょう？ ミリアはマグノリア陛下が選んだ新皇帝です。見た目どおりの可愛いお嬢さんじゃないはずです」

ぐつと詰まる。

「可愛いお嬢さんって、言い方がいやらしい」

反論の仕様がなくて、なんとか切り込めそうな言葉尻に切り込んだ。するとジェミニは「はっ！」と声をあげるとそのまま笑い出した。

「やっぱり、あなたは侮れません。大丈夫ですよ。忘れられた町へ行ってみてください。七英雄の秘めるものと、あなたの秘めるものの差が、どちらを勝利に導くかわかりますから」

ジェミニの言葉にミリアは怪訝な顔をする。

まるで、預言者のよう。

「女魔道士オアイーブはレオン陛下の御世に現れた魔道士です。千年以上の時を経て現れた彼女。ということは、彼女は歴史にのみ名を留める長命種の、古代人かもしれません。歴史家たちの中で七英雄、オアイーブ、長命種についていろいろ推測はされていますが、真実は語られていません。ですが、きっと歴史家たちの推測は正しいと思います」

「推測？」

話の続きを促すために首を傾げる。

「ええ。推測でしかありません。ですが、的を射ているでしょう。」

七英雄は、古代に  
長命種によって捨てられた『英雄』ではな  
いかという説です

「捨てられた？」

7：名前を呼ぶ声、あたたかな手のひら - 3 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

捨てられた、英雄。

その言葉に愕然とする。

「強過ぎる力は、恐怖を与えます」

ミリアは息を呑んだ。

「強過ぎる力は、恐怖を与える」

ジェミニの言葉を繰り返す。

愕然とした。

ジェミニの いや、歴史家たちの推測が正しければ？

「悲しい、ことですな」

目の前の青年は、そう言うのと淋しげな笑みを浮かべた。

仲間に捨てられるのは、きっと悲しい。

悲しい。

淋しい。

そして、悔しい。

「わたし、忘れられた町へ行ってみる。忘れられた町、トーレンス

へ。もし、歴史家たちの推測ってというのが本当だったら」

「本当だったら？」

本当だったら。

傲慢かもしれない。

偽善かもしれない。

見下しているかもしれない。

でも。

「わたしが、七英雄を助ける」

「助けるんですか？」

問い掛けに頷く。

「うん 全力で倒すわ。助けて、七英雄をモンスターにしたの

は、人々の歪んだ恐怖のせいだったと歴史書に記して、歴史の授業

で教えるようにする」

ジェミニがミリアの答えに瞳を見開いた。

きつと、古代人の傍には戻れない。

きつと、静かには暮せない。

今まで、対戦してきた彼らはどこか　憂いを秘めていた。

だから、彼らを助けるためには、ただ倒すしかない。わたしたち

現代人との共存も、できないだろうから。

「そうですね。それが、きつと　彼らのためでしょう」

「うん」

「ミリア　おかしな話かもしれませんが　」

「なに？」

ジェミニが笑みを収めた。

「どうか、七英雄のための英雄になってあげてください」

「　ジェミニ？」

「初めて、この推測を知った時　私は無性に悲しかった」

「わたしも、今聞いて悲しかった」

「約束、しましょう」

ジェミニがカンテラを足元に置いて、すつと右手の小指を差し出してきた。

「私の故郷の約束の印です。小指を貸してください」

同じように右手の小指を差し出すと、彼の綺麗な指が絡まる。

「指切りげんまん、嘔吐いたら針千本、飲ーます」

ゆるく上下に振られる。

そして、離れる指。

「トールンスから帰られたら、またお茶を飲みに行ってください。詳しい話を聞きたいですから」

ジェミニの願いにミリアは唇を噛んだ。

「えー。じゃあ、明日は来ちゃダメなの？」

そう問い掛けるとジェミニはまた声をあげて笑った。

「失礼しました。お待ちしています」

「うん。明日の午前中は大丈夫？」

「ええ」

穏やかに頷くジエミニは、カンテラを取るうとするので、ミリアがそのカンテラを持った。

「わたしが送ってあげる」

「男の矜持を許すのも女の度量ですよ」

その言葉に今度はミリアが声をあげて笑う。

「じゃあ、送らせてあげますわ、風の筆頭宮廷魔術師ジエミニ殿」

「それはそれは恐れ入ります。ミリア陛下」

冗談めかした言葉に冗談めかした言葉が返ってくる。

ミリアはカンテラを持ち上げて、そして階段を軽やかに下りていく。

降りたところで、くるりと回る。

カンテラの光がまるで帯のように煌く。

綺麗。

「ねえ、ジエミニ」

「なんですか？ ミリア」

魔術書を手にした彼は、いつも見かける優しい微笑を浮かべていた。

優しいだけじゃない。与えられる優しさに対しての対価を求める意地悪な茜色の魔術師。

「わたし、トールレンスに行って、もし推測が本当のことだったとしても、他の人には七英雄を助けるつもりのことと言わないわ」

もう一度、くるりと回る。

また現れる光の帯。

「わたしとジエミニとだけの約束よ」

「はい。二人だけの約束です」

その即答に笑顔が浮かぶ。

わたしは、負けない。

また、くるりと回る。

そう、わたしはこの人が優しくしても愚痴を聞いても、その価値のある人だと思われない。

だから、負けない。

まるでカンテラの中で光る炎のよう。熱い硝子越しのあたたかな火。触れば火傷をしてしまう。けれど見た目はとっても綺麗で癒してくれる。

風と水と天の属性を持つ、炎の色の髪を持つ魔術士に向けて、まるで姫君のように礼を試みた。

8：大人と子供と、皇帝と部下と - 1 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

皇帝がバレンヌ帝国の首都アバロンにいる日数は少ない。だが、だからといってまったく帰郷しないわけでもない。

西へ東へ、北へ南へと、大移動をしつつも、アバロンを経由するのが一番本数も多く、なおかつ皇帝専用船などもあるため、戦闘に一区切りがつくたびに寄ってはいる。第一、寄らなければ大臣たちが口煩いのだ。

対照的に、ジェミニは基本的に首都アバロンにいる。

風の筆頭宮廷魔術師のため、なにか宮廷魔術師の力が必要になつたとしても、ジェミニ以外の風の魔術師が任務には赴く。

そのため、ミアアが帰郷をすると真つ先に寄るのは、ジェミニのいる確率の高い術法研究所か控え室。後は孤児院や町の学校など。彼を探す時は、『ミアア』として探すので呼びつけたりなどはない。

『皇帝』として彼を振り回さない。

ミアアはこのことを自分の中の決まりとして、必ず守るようにしていた。

首都アバロンに戻ってきたミアアは、いつも身につけているピンクの鎧を脱ぎ、長い金の髪を解いて愛用の髪飾りも外す。水色の髪飾りはゆらゆら揺れる飾りがついていて、ちよこんと後頭部でミアアを守ってくれる。

今はいない、父母の形見。

五歳の時に誕生日の贈り物としてもらったものだ。

髪飾りも外して一度解いた髪の毛を、再びひとつにまとめる。普段はみつあみをしているから、ひとつにまとめると髪の毛は背中ではゆるく波を描く。

服装も、皇帝になる前に身につけていた軽装だ。

大臣たちに懇願されているので、胸当てなどの簡単な防具と帯剣

だけはしている。

ふと、皇帝の居室の窓を見る。

窓には緑の枝が揺れていた。

ミリアが好きな伝説の中に、ジェラルド陛下が怪盗キャットを追い掛けた物語がある。

華やかな美貌のティシーフのキャット。彼女を助け、怪盗仲間に入れたジェラルド。

ジェラルドは生涯、妻を娶っていない。

それは歴史上のことであるけれど、その当時の家臣たちの言に寄れば彼らは一般的な恋人同士とは言い難かったけれど、お互いに憎からず思っていたという。

実は、いつか好きな人ができたらジェラルドと同じように窓から抜け出そうと、下見は何回かしていたりする。

ミリアは苦笑する。

きっと、使うことはないだろう。

わたしは、忘れられた町での会話を思い出して溜息を吐いた。

忘れられた町、トーレンスでの話はジェミニの、いや歴史家たちの推測どおりだった。

それでも言葉を荒げてしまった自分が情けないが、都合のいい時だけ頼って、怖くなれば捨ててしまふなど非道だと思った。

都合が悪くなれば七英雄を捨て、住み難くなれば世界をも捨て、別世界に移住をする。そんな『超文明』を持った長命種、古代人。

彼らの行動は、まるで、壊れたおもちゃはいらないと捨てる子供のように、苛つきを抑えきれない。

だけれど　とも思う。

そう　けれど、強い力を持つものは、弱者には怖いの

だ。

どれだけ超がつくような文明を持っていようとも、どれだけ長い寿命を持っていようとも。

異常な強さの七英雄は、古代人ですら怖かった。

だから触れたくなくて放り出した。

変な匂いのする汚物を捨てるように。

いつかわたし、『最終皇帝』も、そうなるのかもしれない。

考えたくないけれど、考えてしまう。

ミリアはふるりと首を振って着替えを終えて、扉を守る近衛兵に声をかけて足取り軽く歩き出した。

トーレンスでのことを聞きたいと言ったのはジェミニだ。

いつものように押しかけるわけじゃない。

話すのは少しばかり気が重いけれど、約束があることが嬉しかった。

ジェミニは術法研究所で見つかった。

見つかったと同時にジェミニは追い出されてしまった。他の火の筆頭宮廷魔法使いガーネット、水のフリーの魔術士ヴェガ、地のフリーの魔術士アイヴィの三者が口を揃えて、陛下のお相手をせずつどうすると言ったためだ。

その言葉には、困惑する。正直に言えば困る。

彼と会う時は皇帝ではいたくないのだから。

「ごめんなさい」

だから、素直に謝った。

術法研究所を出て左に逸れる。今日は術法研究所の隣の木でお茶をしようとして、保温ポットにお茶を詰め、籠の中にはお菓子と敷布も入っている。二人で歩く林道は、木漏れ日がキラキラと煌いていた。

「あなたが謝ることではありませんよ」

籠を手にしたジェミニは、いつもの笑顔を浮かべている。

「でも」

それでも申し訳なくて口を開こうとすると、笑顔で続きを遮られてしまった。

「ガーネットもヴェガ殿もアイヴィ殿も、あなたが心配なんですよ。もちろん皇帝ではなく、最終皇帝でもなく、ミリアという少女が心配なんです」

ジェミニの言に瞳を瞬かせる。

「冥の術法を、ご存知ですか？」

敷布を陽のあたる草むらの上に敷きながら、ジェミニが問い掛けてくる。

実際に知っているわけではないけれど、天の術と対を成す冥の術というのがあるのは知っている。何代前の皇帝の時だろう。サラマンダー一族の救助を最優先にしていたら手に入れることはできなかったけれど。

火の対は水、風の対は地、天の対は冥。

全部で六種類の術法が存在をするが、現代人一人が手に入れることのできる術は三種類まで。

対になる術は覚えることができない。

ミリアは天水地の属性。

ジェミニは風水天の属性を持つ。

「そういう属性があるのは知っているけれど、どんな術なのかは知らないわ」

素直に答えると、ジェミニは苦笑を零す。

「魔術士というのは業な性質を持っていて、誰かに止められなければ、突き詰めるまで考えてしまうんです。最高術が完成したとしてもそれ以上を。手に入らない冥の術があればなんとか手に入らないかと。秘密裏にコムルン島に住んでいた魔道士を探した者もいます。私たちの代で土以外の最高術はほぼ完成し、道具

の解析が必要なものもだいたいなくなってしまった。私たち魔術師の存在意義をどうすればいいのか悩んでいた頃に、ミリアが何気なく言った一言が、希望を照らしたのです」

「希望？」

「あなたの代になってから新市街地が完成したでしょう？」

「うん」

「その時にあなたが、世界各地から来る人たちがみんな、新市街地で『月光』を覚えて帰ってくれたら、戦死者がぐつと減るだろうって仰ったんです」

その言葉にミリアは首を傾げた。

そして、首を捻る。

言ったような、言っていないような？

思い出せない。

でも、常日頃から月光、生命の水、元気の水、セルフバーニング、エアスクリーン、アースヒールは世界中の人ができたらいいのに、と思っていたから言ったかもしれない。

基本的な癒しの術、防護の術は、術レベルがあまり高くななくても使える。

「他の術のように冥の術が広く伝わらなかったのはきっと使い勝手が悪かったのだろう、と」

「わたし、そんなこと

言った？」

ついつい頭を抱える。

記憶にない。

「言いましたよ」

木漏れ日の差し込むいい場所に敷布を敷いて、くすくすと笑いながらジエミニがお菓子を取り出す。

「どんなに術と相性の悪い人でも、基本の癒しの術ならどれかひとつは覚えられるだろうから、世界中の人がそんなふう魔法を使えるようになったらいいのになって」

「こぼこぼとお茶を注ぐ穏やかな音が響く。」

そして差し出されたカップを受け取ると中には温かな花芽茶が満たされていた。

「どうしても上のレベル、効果の高い術、攻撃力のすごい術と追いかけてしまいますが、もっと足元を見直さなければいけないのではないかと、魔術師たちで話し合い、子供でも癒しの術ができるように普及をしていこうと決めたのです」

「確か、そんな話が上がってきていたわね」

温かな花芽茶を一口含む。

まろやかな香りが鼻腔をくすぐる。

「子供に教えるということは、同時に教育もすることが前提になります。世界中の子供に分け隔てなく、教育を受けることのできる環境を作ることの難しさ 本当にやりがいがあります」

一朝一夕でできることではない。

それに平等な教育をということになれば、魔術師たちだけでなんとかなる問題でもないし、研究、研鑽ができたとしても、教えることができるとは限らない。

「あなたが頑張っているのに、私たち大人が不甲斐なくはいけな  
いと思っっているんですよ」

それって、子供扱いよね？

そう思ったけど、それは事実なのでミアは黙って小さな籠の中に入っている焼き菓子に手を伸ばした。

さくりとした食感の焼き菓子は、口の中でミルクとバターの味が広がり、そしてすぐに溶けていった。

美味しい。

飲み込んでから空を見上げる。

木漏れ日が綺麗。

9：大人と子供と、皇帝と部下と - 2 - (前書き)

このお話はロマンスिंग サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

「冥の術ね、欲しくないのかってその時の仲間の 誰だったかな 言われたのよ。でもね、その時の皇帝ったら、噴火しそうな山があつて、住民が避難しなくちゃいけないのに術なんかにこだわってどうするんだってすごい怒つたの」

ぼそぼそと続けるミリアに、ジェミニがのんびりと話を促すように尋ねる。

「 そうなんですか？」

「 だけど、その仲間も古代の術っていうのにかなり惹かれて、けっこう食い下がったのね」

ミリアはお茶で喉を潤す。

「 術なんかつて言ったら失礼だけど、武器だつて必要な武器を優先して開発するでしょう？ それと一緒に冥の術が使い勝手がよくて便利で効果が高かったら敵だつて頻繁に使つし、絶対にもっと大多数の人が身につけて幻になんてならないって、皇帝対魔術士って感じでかなり醜い言い争いになったの」

この時の記憶は正直言つてあまり振り返りたくない。

覚えてはいるけれど、鮮明に引き出したいくない記憶だ。

新しい術があれば七英雄をもっと早く、確実に倒せるかもしれない。そんな誘惑に惹かれそうになった。

海の主と呼ばれたや だけどその時の皇帝が思い出したのは 母親を呼ぶ、娘の悲痛さしい海の生き物を助けられなかった後悔。 優雅に海を泳ぐ、白く大きく美しい姿が洩らす悲しみの声。 ずっとずっと、あの悲しい泣き声が耳について離れなかった。 な叫び声。

それが、ずっとずっと夢の中で繰り返される。

どうしてもっと早く駆けつけなかったのだろう。

なぜ、もっと早くに訪れなかったのだろう。

どうして？

なぜ？

自問自答を繰り返す。

そんな後悔を二度としたくなかった。

いつだって最善を選べるわけじゃないけれど、できる限り、自分が善と思えることを選びたい。次の皇帝に自分は正しい道を選ぶとしたらと思ってもらいたかった。

継承を受ける者たちの共通の思い。

次の世代が、自分の生き様を見ている。

鮮明に受け継ぐ。

その恐怖は、他の人には説明しにくい。

正しい皇帝なんて、存在しない。

それは継承をしている自分たちが一番知っている。

陣形や知識などを得たいがために、皇帝に向かない人を指名したこともある。そういう人たちが戦闘のため短命だったことも。薬や道具や武器などを手に入れるために助けたほうが良い人たちを見捨てたこともある。そういう過去があるからか、ここ数代の皇帝たちは暗愚な皇帝と名を残さないように細心の注意を払っていた。

わたしたちは見られている。

皇帝として支配をしている世界の人たちにはない。

一人の人格者として、後世の歴史家たちに見られるのだ。

だから、戦闘をしている時が一番自由だった。

正義の名の下に、殺戮を繰り返す日々。

なんて矛盾した存在なのだろう。

モンスターだろうと、短命種だろうと、長命種だろうと、野に咲

く花だろうと　　生きていることに変わりはないのに。

わたしは、きつと限りなく七英雄たちに近い。

恐れられ、嫌われ、見捨てられた過去の英雄たちに。

それを思うと背筋が震える。

手のひらの中のお茶が波紋を描く。

震えている？

「トールンスから戻られてから、ずっと気落ちされていると大臣たちから伺いましたが本当なのですね」

持っていたカップをジェミニの両の手で外される。

ジェミニは籠の中から紙でできたレースの袋の中から砂糖菓子を取り出すと微笑んだ。

そして、その砂糖菓子を口元に持ってきた。

「あーん」

絶句する。

そして瞬き。

なんですか？

彼の取った行動が理解できなくて瞳を見開いた。

唇にちよこんと当たる砂糖菓子。

よく見れば、それはオレンジの皮を蜜で煮詰めて乾燥をさせたものだった。

「疲れたときには甘いものです」

にっこりと笑って、唇をその砂糖菓子でつつく。

諦めて口を開けると爽やかなオレンジの香りと、甘い糖蜜と結晶化した甘味が口の中で溶けて広がる。

あ、口元が笑う。

頬が緩む。

わかっている。

砂糖を口に含んで笑みが浮かぶのは生理現象だ。だけど、この甘みは心地が良い。

気になる台詞を聞いた気がするけれど、それが吹き飛びそうだ。美味しい。

じゃない、ジェミニは大臣たちから聞いたと言った。

咀嚼しながらも瞳を瞬かせる。

美味しい。

いやいや、違うから。

美味しいものを食べている時の幸福感に、思う存分浸りそうになる自分を一生懸命に叱り付ける。

「だ、大臣たちって、じえ あぐ」

ちゃんと喋れなかったのはジエミニの故意だ。

口を開けたと同時に干菓子を口の中に突っ込まれた。

反則だ。

甘い。美味しい。

じゃない！

ミリアは自分の口元を両の手で押さえる。そして、大急ぎで飲み込んだ。

「大臣たちから聞いたって、なに!？」

「あなたは曲がりなりにも皇帝ですからね。行き先の最大候補である私の元には否応なく情報が伝達されます」

皮肉げな言い回しに眉が寄る。

「本当に、あなたは老若男女に人気がありますよ」

くすりと笑ってジエミニは自分の口の中に干菓子を放り込んだ。

そして飲み込んでからお茶で喉を潤した。

「先に言っておきますが、行動が制約されているわけでもなければ、私にあなたを執務に戻すように注意されているわけでもありません。むしろ反対です」

「 反対? 」

「フリーファイター見習いとしてアバロンにいらしたんでしょう? 故郷には両親もおらず、友達は遠く、慣れない土地、慣れない暮らし。そして皇帝としての重圧感と威圧感。若干十六歳の少女がそんな立場になれば、みんな心配で仕方がありませんよ」

まるで他人事のような言い方をジエミニはする。

「と、いうわけで私は公式でさぼるのを認められています」

につこりと微笑まれて脱力する。

それはつまり 彼はわたしのお守りを押し付けられていると  
いうこと? 」

自分の想像にミリアは唇を噛む。

その唇の上をまた干菓子で突付かれる。

「感情と表情が直結していますね」

間近で微笑まれて頬が紅潮する。

ああ、やっぱりジェミニは意地悪だ！

むっつと頬を膨らませるとジェミニが微笑んだ。

「私の師匠はマグノリア陛下なんですよ」

「え？」

「ヤウダにいらした折、身寄りのない私の強力な魔力に気付かれた陛下が力の制御を身につけさせるためアバロンに招待してくださったのです」

「じゃあ、記憶を辿ればジェミニの小さい頃とか見えるのかな？」

ちよつとそれは見てみたいかも。

小さなジェミニはきつと可愛い。

「さあ、どうでしょう？ マグノリア陛下は皇帝業務に関係すること以外は白い膜のようなものがかかっていて判別しにくいものも多いうって仰っていましたか」

首を傾げた後、ジェミニはまた笑った。

「ミリア、最初の不機嫌の原因はもういいんですか？」

くすくすと笑いながら、ジェミニは砂糖菓子をばいっと自分の口の中に入れた。

「あ」

思わず声が漏れる。

その砂糖菓子、わたしの唇に触れたのに

あまりの不意打ちに顔が真っ赤になる。

もう、こんなじゃわたしの感情なんてバレバレだ。

「我ながら、今回のオレンジピールは美味しくできました」

うんうんと頷きながら自画自賛をする。

わたしの唇に触れていたことはあっさりと言われる訳ですね。

ミリアは不機嫌を隠さずに敷布の上に置かれたカップを手にして

冷めてしまったお茶を口に含む。

「トールンスでの話はだいたいジェミニの想像通りよ。長命種たちはこの世界を捨てて別世界に移住したんだって」

「別世界？」

ミリアは強引に話題を忘れられた町に変えた。

そう、考えたくないけれどジェミニは大臣たち公認のわたしのお守りなのだ。わたしの愚痴を聞くのが彼の役目なのだ。その悲しい現実を認めたくない。

よくても妹。

現実を直視したくないから聞きたくないし、聞かされたくもない。だから、話題を変える。

わたしがどれだけ『皇帝』として彼を縛り付けたくないと思っても周囲がそれを許さない。皇帝が訪れれば彼は作業の手を止めなければいけないし、愚痴を聞かなければいけないし、くだらない世間話も受け入れなければならない。

なんて、悲しい現実。

ミリアは残りのお茶を飲み干した。

「いらないうって、自分たちを守ってくれた英雄を捨て、モンスターが増えて面倒になったからと世界を捨てる。そういう生活って豊かなのかな？ 優れているのかな？ 恵まれているのかな？」

空になったカップを敷布の上に置いて、膝を抱える。

力があって、文明があって、技術があって、逃げ出せる土地を発見したからといって生まれ育った故郷を捨てて移住するのは

本当に優れた種族のすることなのだろうか？

疑問しか浮かばない。

「飛ばされるわけですね」

ぼそりと呟かれた言葉に瞳を瞬かせる。

ジェミニは苦笑を浮かべていた。

その表情に首を傾げる。

わたしにとって、彼とのお茶会は数少ない『ミリア』を取り戻す

貴重な時間だ。

けれど彼にとってはそうではない。

じゃあ、できるだけ率直に愚痴を言っ、なるべく短い時間で彼を解放するのが一番ジェミニのためだ。そう思っ、トールレンスで感じた最大の疑問を口にしたのだけれど、ジェミニは怪訝そうな表情を浮かべている。

なんだろう？

「どうかした？」

問い掛けると、ジェミニは微笑を浮かべて首を振った。

「いいえ　　きつと、一番短い言葉で表すなら『愚か』でしょう

ね」

端的な表現にミリアの心の中はすつとする。

そう、愚かだ。

長命種たちの取った行動はまったく優れていない愚策だ。

なんだかすつきりする。

もやもやと感じていたことをはつきりと言葉にしてもらえると爽やかだ。

そう。愚かだ。

自分たちが生まれ育った　　こんな美しくも煌びやかな世界を捨てて異世界に移るなんて、なんてもつたいない。

「そうだね　　馬鹿みたいだね」

木漏れ日を見上げて笑みを浮かべる。

こんな美しい景色を捨てるなんて、本当に馬鹿だ。

わたしたちには移住する別世界なんてない。

この世界で頑張るしかない。

過去に縛られ、負の感情しか持っていない七英雄たち。既にこの世界を去ってしまった長命種たちを見返すために頑張っている七英雄たち。本当に欲しかったのは長命種たちからの感謝の言葉だったろう。

なんて、可哀想なモンスターたち。

大丈夫。

あなたたちと同じわたしが、あなたたちを解放してみせる。

大丈夫。

わたしが、ジェミニに救ってもらったように、助けてみせる。

絶対。

ミリアは笑顔を浮かべると立ち上がった。そしてジェミニを振り返る。

「ありがとう、ジェミニ。わたし、執務室に戻るね」

「ミリア？」

突然の感謝の言葉にジェミニは瞳を瞬かせる。

「お仕事の邪魔してごめんなさい。愚痴を聞いてくれてありがとう。また愚痴を言いに来ると思うけど、大臣公認なんだから頑張っけ合っけね！」

頑張れ、わたし。笑顔を浮かべろ！！

念じて笑う。

そんなわたしを見てジェミニはまた瞳を瞬かせた。

けれど、それには気がつかない振りをする。

わたしは自慢じゃないけど大人の訝しげな表情には慣れている。

そして、大人の邪魔にならないようにする方法も心得ている。

コツは短く端的に最低限で会話を終える。

質問は最重要点を抑えて、愚痴は要件を纏めて。

今度からはこのことには気をつけよう。

よし。

「ミリア！」

珍しくジェミニが声を荒げるけれど気にしない。

だって、あなたもわたしから早く解放されたいでしょう？

ああ、泣きたくなる。

けれど我慢。

大丈夫。

「じゃあねー！」

笑って踵を返す。

そして駆け出した。

だから気がつかなかった。

駆け出したわたしの背中を見詰めながら「失敗した

」とジ

エミニが呟いたことを

10：大人と子供と、皇帝と部下と - 3 - (前書き)

このお話はロマンスिंग サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

目の前の暖炉の中で踊る炎を見つめながら、ジェミニはぽつりと言った。

「世界が平和になったら、どこか小さな村の魔術師になりたいですね。子供達に勉強や魔術を教えながら、のんびりと暮らすなんて良いと思いませんか？」

暖炉の中の炎が彼の質問に応えるかのようにパチパチと音をたてる。

私を見つめるジェミニの顔はとても穏やかで、そしてなんだか儂げだった。

自分の望みが叶うことはないとわかっているような、そんな淋しげな笑みだった。

だから

だから私はこう答えるしかなかった。

「大丈夫よ、私に任せて」

笑顔で応えるしかなかった。

他の言葉なんて、笑顔以外の表情なんて思い浮かばなかった。

でも 私はちゃんと笑えただろうか？

術法研究所の隣で林でお茶をした後から、わたしはジェミニとお茶会をなるべく最低限にしている。わたしのなかでの最低限だから、決して少ないとは言えないけれど、戦闘から戻ってきた次の日は公休日だからこの日と、どうしても精神的に辛い日だけに厳選してる。

時折、ジェミニの方からお茶に誘ってくれるようになった。その

時はわたしの私室でお茶会になる。

扉は隙間を開け、扉の前には衛兵が立っているから個人的な話題はこのときは出ないし、わたしはあの林のお茶会から極力個人的な話題は出さないようにしている。

ジェミニは不意になにか言葉を紡ごうとしているけれど、お守りをしているということを彼から明言されるのは辛いだけだし、殺気とか気配とかに敏感なわたしはあえて彼の言葉を遮っている。

そう、彼は大人なんだから子供のわたしが気を遣わなくちゃいけない。

なんだか、徐々に自然に笑えなくなっている気がする。

首都アバロンが巨大な白アリに占拠されそうになった時、実感した。

わたしはジェミニが好きだ。

きつと、大人な彼にはわたしの感情などバレバレだろう。

何度か感情と表情が直結していると言われたことがあった。

彼には夢がある。

小さな村の魔術師になるという。

だから、その夢はわたしが叶えてあげたい。

世界が平和になれば　七英雄というモンスターと最終皇帝と

いうモンスターがこの世から消えれば、世界は平和になる。

そうすれば、世界はアバロン帝国が治めなくてもいい。

それぞれのリーダーたちがまとめていくことができる。

もともと、皇帝の私室にミリアファール・トラガの私物は少ないけれど、最近は顕著に減っている。本を買っても図書館に寄贈し、

服などは最低限。読み終わった親書などは暖炉にくべて燃やす。

皇帝として望んでも良いと言われている程度予算が組まれているけれど、それはほとんど使われることがなく、使ったとしても仲間との飲食代などや首都アバロンの子供たちへのプレゼント代になっている。

大臣たちから年頃の娘なのだから綺麗な服や装飾品などに使っても良いと言われるけれど、食指が動かない。モンスターが着飾ったって滑稽こっけいなだけだ。

「大丈夫ですか？ 陛下」

一番年長のソフィアが心配をしてくれる。

仲間に心配をかける皇帝なんてダメだ。

だから笑顔で答える。

「大丈夫よ」

そのわたしの答えにアンドロメケーが「それが一番信用できないのよ」と呟いたのが聞こえたけれど、わたしは聞こえない振りをした。

個人的な感情で気持ちが悪くなるような皇帝なんていららない。

だから、わたしは感情を切り捨てる。

お守りが必要な皇帝なんてこの世界にいない。

だから、答える。

大丈夫と。

本当は大丈夫じゃないことくらい、自分が一番わかっていたけれど、わたしにはこう答えることしかできなかった。

『もう大丈夫ですね』

耳に残る、彼の声。

もう、大丈夫。

そう自分に答えることは、今はできないかもしれない

ジェミニの紅茶が飲みたい。

大氷原探索中の寒いテントの中でそう思う。

寒いな。

ミアは誰にも聞こえないように空気を吐き出すように、そう呟いた。

11：気の早い一番星 - 1 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

「最終決戦へは明後日の早朝出発します。大氷原への出兵は先日任命された五十名の精鋭で。最深部の洞窟へ進むメンバーはフリーファイター・アンドロメケー、帝国兵装歩兵・ジェシカ、ホーリーオーダー・ソフィア、アマゾネス・テオドラ。そして私の、以上五名です。必ず、世界に平和を！ 打倒七英雄！！」

ミリアの宣言に大広間の群衆が呼応した。歓声で室内が覆いつくされる。

そのうち『打倒七英雄』の掛け声が連呼され始めた。先導しているのは帝国兵装歩兵・ユリシーズのようだった。

ミリアは大広間に集まった大臣たちに笑顔で応えようと、片手を挙げて「解散」と合図を送る。

五人の戦士達が大広間を去っても、彼らの興奮は収まらないようだった。いつまでも室内はざわめいている。

約千年、待ち望んできた時が 今、訪れようとしているのだ。

興奮したとしても仕方がないのかもしれない。

ミリアは自分が離れることによつて小さくなる歓声を耳にしなから、ずっと誰に言うこともできず心に秘めていることをまた思う。

（今のバレンヌ帝国は七英雄を倒すのを目標にして政策が取られている。何事にも『打倒七英雄』が優先された。なら、七英雄が滅ぼされたら ？ この国は何をを目指して進んでいくことになるのだろうか）

悪寒は消えない。

巨大な力を持つがために恐れられ、疎まれ放逐された七英雄。わ

たしが彼らの二の舞いにならないとは言い切れない。いや、きっと二の舞になる。

次は『打倒最終皇帝』と人々が叫ぶだろう。

ミリアは肩を抱いた。

ずっと覚悟はしてきた。

この戦いは七英雄というモンスターと、最終皇帝というモンスターの戦いだ。

戦いが終わって平和が訪れたら、今度は皇帝がいなくても生活をしていける世界を作らなくてはいけない。それも早急に。今まで七英雄に向けられていた負の感情が最終皇帝に向く前に。

いくら教科書で教えたって、歴史はきつと繰り返す。

(ジェミニの紅茶が飲みたいな )

彼の温かい微笑みが欲しかった。

でも、甘えちゃいけない。

彼は大臣たちに命令されてわたしのお守りをしているのだから。

ミリアは大広間に背を向けた。

バレンヌ帝国は無くなったほうが良いだろう。

今、広大なこの国は七英雄を倒すためだけに一つになり、皇帝というリーダーの指示に従っている。でも、もう限界だ。

七英雄が倒されれば 目指すものが無くなったのに、こんなに大きな国が一つでいられるわけがない。

むかし昔、まだ小さな国が各地にあった頃は戦が絶えなかった。

敵対していたり、民族間の意思の疎通が合わなかったりという争いではなく、支配者が国を大きくしたいと野望を抱いたための戦いがいたるところで起きていたのだ。

『人』は戦う目標がないと一つにならない。

それはとても寂しいことだけれど、過去の歴史書を紐解く度にそう考えざるを得ない。

小さくなる歓声を背中に受けながらミリアは一つの決意をしていた。

「陛下、よろしいですか？」

「なに？」

振り向くと穏やかな微笑を浮かべたソフィアが居た。

ソフィアはカンバーランド領の聖騎士<sup>ホーリーオーダー</sup>だ。水と天の術が得意な騎士というよりも術士の属性の強い。落ち着いた大人の女性で、長いベールが清楚な雰囲気さをさらに強調していた。光の加減で藍色にも見える長い黒髪が整った顔の横で揺れる。

「申し訳ありませんが、後で開発室横のテラスに来て頂けませんか？ お渡ししたいものがあるのですが、ここではちよつと」

ソフィアは少し考えてから頷いた。

ジェミニのところに行くのは最終決戦に赴く前日にあたる明日でいい。なるべく短い時間で済ませたほうがいいだろう。きっと、それが最後になるから。わたしの感情が溢れてしまうのが一番の心配だ。だから、今日は行かない。

ソフィアに微笑んで頷く。

「うん、わかった」

ソフィアに呼ばれて行った、開発室横のテラスにはすでに人がいた。ソフィアではない。

「ジェミニ」

ソフィアの眩きが聞こえたのか彼は振り向くと少し目を見張り、そして微笑んだ。

茜色の魔術士。

「えーと、隣、いい？」

慌てて訊ねるソフィアに、ジェミニは優しい笑みを向ける。彼の微笑みを見るとなんだか温かい気持ちになるのはどうしてだろう。

どうしてもなにも わたしは彼が好きなのだ。

どうしようもないくらい、彼が好きだ。

だから、微笑だけで心が震える。

「どうぞ」

ミリアはジエミニの隣に並んで立つ。

眼下に広がるのは新緑の森。

森を吹き抜ける風は、二人の髪を撫でて通り過ぎる。

二人はしばらくの間、無言で遠くまで続く森と空を見つめていた。こんなふう急に二人きりになるとは思わなかったミリアは、頬を微かに赤く染めていた。今まで、宮廷魔術師の控え室や皇帝の私室で二人きりでお茶をしたこともあったが、その時もドアは開け放したままだった。

『変な噂がたつと申し訳ありませんから』

そんな風に言われたことがある。噂がたつのは構わないと答えたけど、ジエミニは『あなたに好きな人が出来た時にそんな噂が流れていたら困るでしょう？』と笑って私の言いたいことに気付いてはくれなかった。

言われたのは、彼が大臣たちに頼まれてお守りをしているとわかる随分前のこと。

その時に『ジエミニとなら噂になっただって構わない』と伝えていれば、なにか変わったのだろうか？

うっん、きつと言えない。

あの時は、今の状態を失いたくなかったから。

もし振られたら、わたしはこんな風にジエミニとお茶が出来なくなる。きつと気まずくなつて、のんびりとおしゃべりが出来なくなる。

そんな風に思ったから。

それが最大の恐怖だった。

わたしには勇気がない。

彼の笑顔は、今のわたしの一番大切な宝物だから。

手に入らなくてもいい、見つめることさえ出来なくなるよりは

わたしはこんな意気地のない女なのだ。

それに、穢れたわたしが彼に触れていいのかも 悩んでいるから。

いつか捨てられる英雄。

なんだか、林のお茶会から自分の思考がぐるぐるしているのがわかる。

きっと考えても仕方ないことでわたしは悩んでいるのだろう。

風が吹いて、彼の茜色の髪の毛がなびく。

ジェミニが隣にいる。それだけでこんなに頬が赤くなり、心拍数も上がるのに

「ソフィア、遅いですね」

ジェミニが階段を振り向いてのんびりと言う。

ミリアは「そうね」と呻づくことしか出来ない。彼もソフィアに呼び出されたのだろうか？

見上げると、ジェミニは腰に提げていた小さな袋の中から小瓶を取り出している。そして、ミリアの手に載せた。不思議な緑色をした陶器の瓶。

「これを渡すためにソフィアと待ち合わせしていたんですが、ミリア本人がここにいるんですから、あなたに渡しておきます」

ミリアは手のひらの、黄金色の房と飾りのついた小瓶を見つめる。蓋を開けると中には鮮やかな青い液体が入っている。

「皇帝液です」

「すごい色ね」

ミリアの返事にジェミニは苦笑をする。

「色もすごいですよ、味もすごいですよ」

「ええ？」

ミリアは蓋を戻した小瓶を見つめながら、眉をひそめた。

「手に入りにくい材料があったので、今はこれだけしか出来なかったのですが、最終決戦でお役立て下さい。それで一回分です。後、名前通り皇帝であるミリアにしか効きませんから、他の人に飲ませ

たりしないで下さいね」

「ありがとうございます」

仕事とはいえ、ジエミニが自分のためだけの薬を作ってくれたかと思うと、それだけで嬉しかった。

「いえ、それじゃ」

「待って！」

12：気の早い一番星 - 2 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

あっさりと帰ろうとするジェミニを思わず呼び止めたミリアだが、それ以上は言葉が続かなかった。

顔はさらに朱に染まり、手はがくがくと震えてきた。

ヴリトラが突然襲いかかってきても震えることがないっていうのに、どうしてジェミニを前にしたただけでこんなに震えるの!?

「ミリア?」

ジェミニが覗き込むように身を屈める。

ミリアは突然のジェミニのどアップに驚き、さらに動揺する。

「ミリア 後で」

ジェミニがなにかを言いかけたがミリアの耳には入らない。

明後日には七英雄との最終決戦に出発してしまう。今、勇気を出して自分の気持ちを言わなければ、一生ジェミニに伝えることは出来ないかもしれない。

負けてしまうということもあるだろうから。

でも、言わないほうが 生きて帰って彼に自分の気持ちを打ち明けるんだ! という目標が出来ていいかもしれない。

そんな言い訳が頭の中でぐるぐる回る。

結局、告白する勇気がないだけなのに、そんなふうに自分の気持ちを言いくるめようとするなんて

記念に告白する勇氣もないわたし。

それに 一瞬忘れそうになったけれど、彼にとってはわたしはお守りの対象なのだ。

大臣たちに頼まれたから、わたしの話し相手をしてくれているのだろう。

彼と話すのはいつも楽しかったけれど、彼もそうだったとは限らない。

そう思うと胸がちりちりと痛む。

「ミリアは軽く頭を振ると、にこやかな笑顔を浮かべた。

「！」  
その瞬間、殺気を感じて、ミリアはジェミニの胸を押す。彼を傷つけることはできない。彼を突き飛ばすと同時に反対方向に受身を取って移動する。

「大丈夫ですか？」

ジェミニが慌てて声をかけてくれる。

「大丈夫」

短く答えて殺気が放たれた場所を探る。

階段の途中だったから、変な受身を取ってしまったって左肩が痛い。

この感覚は軽い打ち身だろう。後で癒しの術法をかけなければ。すっと目の前に影ができる。

殺気がなくて、あまりにも穏やかな気配だったから気がつかなくったけれど、ジェミニがミリアの前に立ち塞がった。風の防御壁、エアスクリーンが二人の周囲を覆う。

ジェミニは男にしては華奢な感じがするけれど、こんな風に目の前に立たれると意外に筋肉がついていることがわかる。ユリシーズに無理やり鍛えられているせいなのだろう。

頭では早く離れなくてはと思う。

きつとわたしが皇帝だから狙ってきている。だからわたしが離れば彼は安全だ。せつかく彼が守ってくれるのだから、わたしは彼に背中を預けて背後の森の中の気配を探る。モンスターがアバロンにまで押し寄せてきているのならこの森も怪しい。

だが、森にも殺気が放たれた場所も、今は怪しい気配はない。

「ミリア」

呼びかけと共に背中があたたかくなる。

後ろから、ジェミニの腕が包み込むようにミリアを抱きしめた。考えてもいなかったジェミニの行動に、ミリアはただおろおろするばかりだ。

え？

「ミリア。この戦いが終わったら、私と結婚してくれませんか？」  
耳元に囁かれる甘い言葉。

は？

驚いて目を見開いたまま振り向くと、ジェミニはそっとミリアの体を離して照れたように笑った。

「返事は最終決戦が終わってからで構いませんから」

目の前で茜色の魔術師が微笑んだ。

いやいやいや。

大臣たちに頼まれたからって、一生お守りをするつもりですか？

彼の言葉に心の中で反論する。

口を開けるけれど、言葉が出ない。

自己犠牲にしたって程がある。

わたしのことを子供だと言ったのはジェミニでしょ？

そう言い返したいけれど　よくよく考えれば、彼自身がわた

しのことを子供だと言ったことは　なかつたかもしれない？

あれ？

でも、少女だと言われたことは何度かあるはず　それはつま

り、子供だということのはずだ。

えっと　今は幻聴、だよな。

一歩下がる。

きつとわたしの願望が幻を生んだのだ。

もう一歩下がる。

つてことは、わたしの願望はジェミニとの結婚？

自分の隠れた欲望に絶句する。

いえいえ、モンスターと一生を添い遂げさせるのは申し訳ないで  
す。

そう、わたしはこの戦闘が終わって、世界が各部族ごとに治める  
世界になったら、一人で気ままに旅をするつもりなのだ。最終皇帝  
だとわからないように、吟遊詩人の格好とかして、のんびりと残っ  
ているモンスターを倒しながらいろいろな国を訪ねて一人で生きる

のだ。

打倒最終皇帝と呼ばれるのは嫌だったから。役目の終わった役者は舞台から去るのが常。

でも、これから一生を一人で旅して暮らすのは考えるだけで淋しかった。

だから幻聴だ。

都合のいい幻聴だ。

眉を寄せる。

「ミリア？」

ジェミニがわずかに首を傾げて尋ねてくる。

「

口を開くけれど声が出ない。

ジェミニが微笑む。

その微笑を見たら決壊した。

ミリアの大きく見開いた瞳から大粒の涙が、次々と転がり落ちる。

「ミリア」

ジェミニが慌てて袖でミリアの涙をふき取ってくれる。

彼の微笑みは優しいままだ。

「幻聴が聞こえた」

つい、ぼろりと零す。

きつと、彼は怪訝な顔をするだろう。

そんな幻聴が聞こえるくらいジェミニが好きだなんて、もう末期だ。

明日、最期のお茶をしようと思っていたけれど、やめたほうがいいだろう。

「幻聴などにしないで下さい」

ジェミニは苦笑を零していた。

その返答に瞳を瞬かせる。

「好きですよ、ミリア」

彼の言葉に、涙がますます止まらなくなる。

幻聴だ。

彼は大人で、わたしは子供で。

わたしは皇帝で、この人は部下で。

大臣たちにお守りを頼まれていて

好きだなんて 好きだなんて。

嘘。

「嘘じゃありませんよ」

心を読まれたかのように返事をされる。

ミリアは赤面するとさらにもう一步ジェミニから離れ、階段下の草むらに残像剣を放った。

「ちよつ！ 陛下、危ない！！」

草むらの中からアンドロマケー、ソフィア、ジェシカ、テオドラ、それにユリシーズまでが飛び出してきた。

「 やっぱり」

呆れたようなジェミニの呟きが聞こえる。

「陛下！ 恋愛成就おめでとunggございます！！」

「意外とジェミニって手が早いのね」

「やっぱり両想いだったじゃない」

言いたいだけ言ってから彼女たちは、その場から逃げ出した。

「みんな、わたしで遊んでるんだから」

後であいつらの給料カットしてやる！

その場にへたへたとしゃがみ込むミリアに、遠くからアンドロマケーが声をかけてきた。

「陛下あ！ 今日私の部屋に泊まることになってますから、朝帰

りしても大丈夫ですよ！！」

「アンドロマケーの馬鹿あ！」

涙声で叫び返すが、アンドロマケーはウィンクして去っていつてしまった。

アンドロマケーは傭兵だ。<sup>フリーファイター</sup>明るくていつも元気で、メンバーをかわかって遊んでいることが多い。だけど、こんな時にまでからかわ

なくたっていいのに。

ふと見上げるとジエミニが肩を小刻みに揺らしていた。笑いをこらえているらしい。

ああ、なんだか力が入らない。

ずっとずっとぐるぐるしていたから、こつという状態になった時、どうすればいいのだろう。

両想いだと、素直に喜ばいいのだろうか。

それとも、聞こえなかった振りをして彼を解放するべきなのだろうか。

後者のがいいかもしれないとは、思う。

「お互い、困った友人を持ったものですね」

ジエミニが苦笑をして隣にしゃがみこむ。

近い。

お願いだから、もっと遠くに行つてと思つけど、傍にいてくれるのは素直に嬉しい。

なんて矛盾した感情。

「　　ねえ、ジエミニは知つてたの？」

「はい？」

「はい？　　じゃないわよ。やっぱり、みんながいるって知つてたんでしょ？」

ジエミニは困つたように肩を竦めて答えた。

「知っていた訳じゃありませんが、ソフィアに呼ばれたのにあなたが来た。それでなんとなくわかりました」

ミリアの頬がぷうと膨らむ。

「でも、言ったことは嘘じゃありませんよ。私の本心です」

本心って　　求婚とか告白とかが？

彼が、わたしを好き？

信じられなくて口が開いてしまう。

ゆっくりと二度、瞳を瞬かせた。

また涙が溢れる。

「本当に？　でもさっさと帰ろうとしたじゃない」  
そう、彼はさっさと帰ろうとした。  
悲しくなるくらいあっさりしていた。  
それなのに、わたしが好き？  
正直、信じられない。  
言わされているんじゃないかと疑いたくなる。

13・気の早い一番星 - 3 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

じとつと見詰めると、ジェミニは微苦笑を浮かべた。

「ギャラリーがいるところで告白したくなかったんですが、あなたを背後に感じたら理性が吹き飛びました」

しゃがみ込んだ彼は、ミリアの頬にかかった髪の毛を優しい仕種で撫で付ける。

「や、やだ。からかわないですよ」

「からかってなんかいません」

彼はそつとミリアの手を取った。

へたり込んだミリアの隣に、ジェミニは片膝を立てて座り込んだ。ミリアの左手を取って、ジェミニが指に沿って撫でる。

左手を取られた時、肩が少し痛んだ。

でも、その痛みよりも手を取られた心の痺れのが強烈だった。

「ユリシーズに怒られましたよ。ミリアのように無条件で自分を好いてくれる子に、ちゃんと気持ちを伝ええないなんて男じゃないって」

それって、私の気持ちなんて他の人にもバレバレだったこと

！？

確かに何度も、感情と表情が直結していると言われたけれど。

「そういえばアンドロマケーやソフィアに、ミリアの気持ちを弄ぶ気じゃないのかって責められたこともありましたね」

のんびりした口調に思わず叫んだ。

「あ わたしが頼んだんじゃないのよ！」

アンドロマケーとソフィアの馬鹿！！

そこで気がつく。

「じゃあ、今の求婚ってやっぱり二人に言われたから？ 本当は迷惑なんですよ！」

慌てて立ち上がるうとするけれど、力が抜けていて上手に動けない。

それにジェミニがすっかりと手を握り締めているため離れられなかった。

目の前の彼の表情は真剣そのものだった。

「ミリアが二人に頼んだなんて思ってもいませんし、迷惑だなんて思ったことは今まで一度だってありませんよ」

「だつて」

その後の言葉は言うことができなかった。

ジェミニが、ミリアの唇を自分の唇で塞いだせいで。

「左肩は大丈夫ですか？」

夢見心地でぼんやりしているミリアの左肩を、ジェミニがそつと撫でる。

「っ！」

小さな呟きと共に、左肩には温かな水の感触が伝わってきた。

それと同時に痛みがなくなる。

胸の痺れはそのままだけ。

「あつたかい」

「普通、癒しの水は冷たく感じるものですよ？」

威力は押さ

えてありますが、これはウィンドカッターですね」

たぶん、帝国軽装歩兵のジェシカの技だ。こんな正確に傷をつけさせないように技を放てるのは彼女しかない。あのウィンドカッターの軌道ならジェミニは傷つかなかつただろう。回避しようとして判断を迷い、肩を打ちつけたのはミリアのミスだ。

緑がかつたシルバーブロンドは真っ直ぐでジェシカの性格のまま。

彼女がこんな悪戯に参加するとは思えないのだけど

「冷たくないよ。ジェミニの技だもん」

その呟きに身体を引き寄せられた。

遅いとはいえないけれど、細身の割にはしっかりと筋肉のついた身体に抱きしめられる。

あたたかい。

こつという時って抱き返してもいいのかな？

所在無げな両手を持って余す。

抱き返したいな。

「あなたは 無自覚というのはすごいですね」

長い溜息と小さな呟き。

無自覚？

首を傾げたいけれど、きつく抱きしめられていて動かすことができない。

頭を撫でられるのに勇気付けられて、ミリアはそっと抱き返した。ジェミニの胸に自分の頬をこするようになる。

左肩はもうちつとも痛くない。

「よくわからないけど 嬉しい」

ジェミニにとって、わたしなんてお守りの対象だと思っていた。

よくて妹。

皇帝と部下、大人と子供。そんな相容れない関係なのだと思っていた。

「あのね、まだ誰にも言っていないんだけど、最終決戦が終わったらバレンヌ帝国を共和国にしようと思うの」

「ミリア」

ジェミニの手が止まる。

「うん。ジェミニが言いたいことはわかるわ。誰が聞いているかわからないものね。でもね、わたしも、もう皇帝から開放されていいと思うの。そうしたら、ジェミニに着いていつていい？」

「え？」

耳元でジェミニの驚いた声が聞こえる。

「ジェミニは小さな村の魔法使いになりたいんでしょう？ ジェミニが行くところならわたしも着いていきたい」

居心地のいい腕の中、胸に頬を寄せて囁いた。

「ミリア」

「少し、時間はかかるかもしれない。だから待たせちゃうことになるけど 待っていてくれる？」

ジェミニはミアの頭のとっぺんにくちづけると、少し体を離していつもの優しい笑顔を浮かべた。

彼の瞳はなんだか今にも泣きそうに潤んでいるように見える。

「はい。いつまでも、お待ちしています」

「うん」

そうして、ひとつ言い忘れに気がつく。

「ジェミニ、わたしもあなたのことが好きよ」

ありったけの想いを込めて微笑む。

好き。

大好き。

見上げるとジェミニが吃驚したように瞳を見開いた。

彼のこんな表情は珍しい。

珍しいものを見たな　とのんびり思っていると、また彼が引き寄せてくれた。

ゆっくりとわたしたちの影が重なる。

空全体が淡いオレンジから紫へ、そして青と色を変える間、二人は抱き合っていた。

「　そろそろ冷えてきましたね」

「うん」

「中に入りましょうか？」

「いや」

「いやですか？」

「宮殿は嫌」

きゅつと背中を握りこむ。

まだ、離れたくない。

「じゃあ、私の部屋に行きましょう」

彼の言葉は疑問系じゃなかった。

そのことに驚いて顔を上げると、熱い瞳をしたジェミニの真剣な顔があった。

物欲しそうな熱い瞳。

その瞳にぞくりと背筋が震える。

「うん」

ミリアはこくりと呻づくくと促されて立ち上がった。

差し出された右の手のひらに手は置かず、ジェミニの右腕に自分の腕を擽める。

幸せそうな笑顔で自分の腕に抱きつく少女をジェミニは眩しげに見つめた。

空には気の早い一番星が煌めいている。

#### 14：彼の事情（前書き）

ジエミニニ視点です。次回からは最終パーティーがわらわらと出てきます（笑）

## 14：彼の事情

大人になるというのは、年齢を重ねるだけでは駄目なのだ。

そんな、当たり前のことを実感するようになったのは、ある少女と出会ってからだだった。

少女の名前はミリアファラ。

愛称はミリア。

他の人が彼女のことを『陛下』と呼ぶ中、自分だけが彼女のことを『ミリア』と呼ぶことができる。それが本当に特別だということ、大臣たちから諭される前から知っていた。

数代前から、大臣たちの中で継承されている一冊の本がある。

それは皇帝交代にまつわるいろいろ

皇帝の人格が変わるだけで、国政全体が変わることもある。あまりの重圧に耐え切れずに、まるで自殺をするかのように戦死する皇帝もいた。

それを繰り返さないように 特に昨今では女性の皇帝が多いため、大臣たちも慎重になっていた。

マグノリア陛下に見出された自分は、皇帝という立場に対して他の人よりもよく知っているつもりだったが、それがつもりでしかなかったことは彼女との交流の中で明らかになっていった。

最初はまるで娘 それは言い過ぎか まるで妹を見ているような気分だった。

マグノリア陛下に着いて慈善事業に赴くことも多かったから、その時の孤児院や学校にいる子供たちに向ける気持ちと、最初の頃は本当に代わりがなかった。

出会った頃のころと変わる表情はそのままに、ミリアは戦闘を終えて帰還する度に大人びた表情を見せるようになった。

口調はそれほど変わらなくても、口の端に乗る言葉は政治や経済を鑑みた発言が増え、記憶を継承しただけではなくミリアが陛下として育っているのを感じられた。

ミリアが数少ない個人的な時間を、自分と過ごすことに使っているのはわかっていて。

正直に言えば、自分でいいのだろうかと戸惑いもした。

けれど、この世界で身寄りのない彼女を『ミリア』として扱うのが自分しかいないがわかっていてから、彼女が求めるように少女扱いをしようと思っていた。

それが、誤算だった。

ミリアの中に、大人の女性と同じ艶が生まれていることになかなか気がつくことができなかった。

わかっているつもりで、本当はなにもわかっていなかったのだ。

彼女の仕種に心が跳ねた時があった。

忘れられた町へ向かう前のこと。

カンテラを手にした彼女がくるりと回り、そしてまるで姫君のように礼をした。

その姿を見た時に、彼女を『少女』として見ていた自分自身を訝しんだ。

ミリアの表情はいつも感情と直結をしていて、からかえばすぐに反応をするのが面白かった。それをわざわざ行って百面相を見ては楽しんでくれたのに

あの礼が、自分の心を大きく揺さぶった。

小さな秘密を共有することを嬉しがる彼女。

疲れたら、自分の紅茶が飲みたいという彼女。

自分が名前を呼ぶだけで喜ぶ彼女。

私は、ミリアを一人の女性として好きなのではないか？

それは、小さく、そしてとても重要な自分への疑問。

その疑問に答えが出そうな頃、からかい過ぎてしまった  
これのせいで、彼女の中でひとつの結論が出たようだった。

私への感情を抑え込む。

それがミリアが出した答え。

そのことに苛立っている自分を鑑みて実感する。

好きだ。

もう、隠す必要なんてない。

年齢なんて気にしなくてもいい。

「世界が平和になったら、どこか小さな村の魔術師になりたいですね。子供達に勉強や魔術を教えながら、のんびりと暮らすなんて良いと思いませんか？」

彼女が肯定の返事をしてくれたら、一緒に行こうと誘おうと思っていたのに

「大丈夫よ、私に任せて」

彼女の返事は、涙を堪えたものだった。

まったく笑顔に見えない繕った笑み。

こんな表情をさせたかったわけじゃなかった。

まるで成り行きのような求婚。

それに彼女は飛び切りの笑顔で答えてくれた。

是と。

暖炉の前で話したことを覚えていた彼女。

待っていて欲しいとはにかむ彼女。

彼女の真つ直ぐな感情に、自分の理性が焼き切れそうなのを懸命に抑えながら初めてミリアを自室に招待をした。

最上級のやさしさを心掛けて、ミリアのすべてに触れた



15：そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 1 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

最終パーティーメンバー

最終皇帝：ミリア（女最終皇帝）

帝国軽装歩兵：ジエシカ

フリーファイター：アンドロマケー

元カンバールランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダー：ソフィア

サラマットに住む女戦士、アマゾネス：テオドラ

「陛下！ おはようございます」

「おはよう。アンドロマケー、遅いわよ」

陽気なアンドロマケーの挨拶に、謁見の間の隣の部屋で準備をしていたミリアは苦笑で答えた。彼女は約束の時刻に半時ほど遅れて来ている。

彼女はのしかかるようにミリアに抱きつくと、耳元でそっと囁いた。

「ジェミニは優しかったですか？」

瞬時にミリアの顔が紅潮する。顔だけでなく耳や首まで真っ赤になっっていた。

その様子を見てアンドロマケーはにたりと笑う。

「あら、こんなところにキスマーク」

「ア、アンドロマケーの馬鹿あ！」

「いや〜ん。陛下、可愛いv v」

慌てて首筋に手を当てるミリアを、アンドロマケーは嬉しげにからかう。

傍で決戦の装備の再点検をしていたジェシカが二人の漫才に割り込んできた。

「アンドロマケー、陛下、ちゃんと働いて下さい」

「はい」

「はい」

アンドロマケーは渋々とミリアから離れると、ジェシカから装備の一覧の書いてある紙を受け取った。

「ところで、ジェシカのほうはどうだったの？」

突然矛先を向けられたジェシカは目を見開いていた。緑がかったシルバーブロンドがさらりと揺れる。

「ロナルドと上手くいったの？」

「上手くもなにも、なにもないのだから、どうにもなりようがないだろう」

「え？ジェシカってロナルドが好きなの？」

「ミアののんびりとした問いに、嬉しげにソフィアが答える。

「はい。初恋なんだそうですよ」

「違う。単なる幼馴染なだけだ」

間髪入れずにジェシカの冷たい声がかえってくる。

「じゃあ、その指輪はなによ。昨日までそんなのしてなかったじゃない」

「こ、これは」

珍しく口吃るジェシカを、アンドロマケーは楽しそうに問いつめる。

「昨日は女四人で楽しく飲もうと思っていたのにジェシカったら急に帰ってしまったんだもの。あの後どこにいったのかな？ん？」

「そう言うアンドロマケーだって、昨日はユリシーズと楽しそうだったじゃない。テオドラはクリストフといい感じだし、陛下はジェミニと熱愛中だし、ひとり身なのはわたくしだけなんだわ」

ソフィアはわざとらしく溜め息をついた。

肩にかかった藍色を帯びた長い黒髪を指に巻く。わざとらしい口調は本当にわざとだ。ソフィアは見た目の清楚さに反比例をしてとことん格好良いという言葉が似合う。

ミアはソフィアのわざとらしい口調よりも、その内容に吃驚して声をあげた。

「ええ！？クリストフの片思いの彼女ってテオドラだったの？」

「まだ彼女じゃないよ。告白はされたけどね。あたしは聖騎士ホーリーオーダーの妻になるような清楚な女じゃないから、断るよ」

「テオドラは、クリストフのことが嫌いななの？」

まっすぐ見つめてくるミアの瞳を正面から見つめ返しながらテオドラは答えた。

「陛下。好き、嫌いだけではどうしようもないことがあるんですよ。

お互い、自分のアイデンティティを捨てることができない。そんな二人が一緒になることはとても難しい」

「そういうものなの？」

「はい」

「陛下の場合は全然大丈夫ですよ。ジエミニは優しいですから」  
からかいを含んだアンドロマケーの言葉に、テオドラが固い顔のまま左右に首を振った。

「優しいと譲歩は違うんだ。いくら優しい人でも、自分の信念を曲げることをしていない人と一緒にいることは、苦痛を伴う」

アンドロマケーは溜め息をついた。

椅子の背もたれに身を任せる。

「なんだか、ムツカシイこと言うのね」

テオドラの言うことはもっともなのかもしれない。

例えば好きでも相いれない立場というものがある。

テオドラはアマゾネスの戦士として戦わなければならない。クリストフはホーリーオーダーとして領地を護らなければならない。

お互いに譲れない『護るもの』がある。

それぞれが、その『護るもの』のために今の自分を作り上げたのだ。

決して結婚するからといってやめられるものではないし、捨てることも出来ない。そんなことをしたら自分が自分でなくなるだろう。そんな二人の恋を成就させるにはどちらかが、もしくは二人ともが『護るもの』を捨てるしかない。

しかしそれは、たぶん負い目しかもたらさない。

お互いが自分のために相手を苦しめていると思うだろう。その気持ちを持ち越えねなければ不幸にしかならない可能性が高い。

「難しくなどない。私は強くない。だから駄目なのだ」

だから自分達が結ばれることはない。

テオドラが言外に漏らした思いは、深くミリアの胸に突き刺さった。

「 どうして？　なんで駄目なの？　ちゃんと言った？　」  
「陛下」

がくがくと体が震える。遣る瀬ない切なさ、テオドラの清冽な意思の美しさに畏れを抱いているのだろうか。

それとも自分がそんなことを一度も考えていないことに対して憤っているのだろうか。

長い金の髪を部族特有の髪飾りで結び、真つ赤なスリットの入った戦衣。

いつも毅然と槍を振るう。

女性しかいないサラマツト。その中でも一番の才能と力と意思を持つ女戦士。

生まれた時から護るために育てられたテオドラ。

「泣かないで下さい」

テオドラが慌てている。

それを不思議に思っただけで、自分の瞳から涙が零れていることに気がつく。頬を撫でると、涙の跡があった。

「ごめんね。泣いたりして。昨日からなんだか涙腺が弱ってるみたいな」

「いえ。陛下　暫、席を外してもよろしいですか？」

テオドラは困ったように長い髪を掻き揚げると言った。

「考えてみると、私はあの御仁ごしんに駄目だめだと言っていない。少し説明してきたいのですが　」

「うん。いいよ。後はやっておくから」

ミリアの返事を待たずにテオドラは駆け出していた。

「テオドラ！　頑張れ！！」

アンドロマケエの声援にテオドラは恥ずかしげな笑顔を返して、そして外に飛び出していった。

「上手くいくといいな」

ジェシカの呟きに三人は心から呻づいた。

「お二人ともお強いですから大丈夫ですよ」

ソフィアの笑顔での断言はこういう時にとても心強い。きっと大丈夫。

「うん」

「上手くいくよ。 気になるなら見に行くかい？」

「だ、駄目よ！ 邪魔しちゃ駄目！」

「心外です、陛下。邪魔などしませんわ。昨日だってあそこでウィンドカッターを繰り出さなければ、何も進みませんでしたでしょう？ 手助けこそすれ、邪魔だなんて。ほほほ」

「とにかく、駄目って言ったらダ・メ！ ほら、働く、働く」

ミリアは椅子に深く座り込んだアンドロマケの腕を引っ張った。

「そんな殺生な」

「下らぬことを言わずに装備の点検を手伝え」

ミリアからアンドロマケを引き取ると、ジェシカは持ち場に戻った。その間、アンドロマケは引き摺られるようだった。

それを見てソフィアが楽しげに微笑んだ。

いつも優しげに微笑んでいる彼女。ソフィアは多くを語らないけれど、きつとわたしが思っている以上に色々な思いを抱えているのだろう。

「どうなさいました？」

「う、ううん。なんでもない」

慌てて手を振るミリアを見つめて、ソフィアは少し楽しげに苦笑した。

「わたくしのことなら、陛下が気になさることはありませんわ。真実、想い人がいないのですから。気楽でいいですわよ」

「屍に心奪われているのに、それを気楽というのか？」

ジェシカの問いかけにソフィアはいつもの微笑みを浮かべて答えた。

「もう、乗り越えたことです。心奪われてなどいませんわ」

「そうか、ならいいのだ」

どういうこと？ と聞こうとした瞬間に、アンドロマケが首を

微かに横に振るのが目に入った。

「陛下、続きはどこからですか？」

ソフィアが穏やかに微笑む。

この人の落ち着いた微笑みはどこかジェミニに似ている。

大人の笑み。自分の感情を隠しての笑み。

「あ、武器と防具は終わったから次は薬からいきましょうか」

それから和やかに装備の再点検が続けられた。

ミリアは自分が他人の心内を読むのがどれだけ下手か、痛感した。人それぞれに心がある。

それはわかっていても実際、人の心はわからない。

ならばせめて思い遣るしかない。

でも言われなければわからないことのほうが、この世の中には多いのかもしれない。

そこで疑問が湧く。

わたしはどれだけジェミニの気持ちを知っているのだろう。わたしの気持ちはどれだけジェミニに届いているのだろう。

ミリアはそっと首筋を撫でた。

なんだかとても泣きたくなった。

「点検はもう済んだんですか？」

「うん。後は各自の剣や槍だけ」

ジェミニはミリアのカップにお茶を注ぐ。

「わあ、良い香り」

湯気と共に林檎の爽やかな香りが立ち登る。

今日は、宮廷魔術師の控え室の扉は閉まっている。ミリアはその扉をそつと見やっつてからジェミニに問いかけた。

「ジェミニってわたし以外の誰かと付き合ってたこと、ある？」

ジェミニは困ったように微笑むと、ミリアにアップルティーの入ったカップを手渡した。そして少し考えてから口を開く。

「あなたには嘘を言いたくないから、正直に答えますが　十年程前にアンドロマケーと少しの間ですが、付き合っていました」

「え？」

ミリアは意外な答に戸惑っていた。

「とは言つても、本当に少し、一ヶ月程で振られてしまいました」

「　見る目無かったのね」

なんとか答えたものの、ミリアは自分の声が震えていることに気付いていなかった。

「付き合つたと言つても彼女には他に好きな人がいて、私はその人に対する、当てつけのためだけの恋人だったので。　私はそ

れでも良かった。　だけど彼女には、そんな私の優柔不断な優しさが耐えられなかったのでしょうか。　逃げるようにアバロンの兵士養成学

校に入学してしまつた。　忘れるのに時間がかかりましたよ」

「アンドロマケーを追いかけて、術法研究所に入ったの？」

ミリアの震える問いにジェミニは微かに笑つて答えた。　なんだか冷たい笑みだつた。

「そんな理由で入れる程、アバロンの研究所の敷居は低く無いですよ。　もう必死に勉強して入所資格を手に入れたんですから」

「　」

「再会したのは少し前です。　あなたが随兵を選んでいる時にユリシーズがアンドロマケーを紹介したでしょう？　その時です」

その時、ミリアはアンドロマケーを見て素敵な女性だと素直に思つた。

「お互い唾然としましたが、すぐに仲良くなれましたよ。　付き合っていたのは過去のことですからね」

「そんなにあっさりと思い切れるものなの？」

「そうですね、意外とあっさり思い切れましたね。時間も経っていましたが、他に想い人もいましたから」

「ミリアはカップをきゅっと握り締めた。

「聞きたく無い。」

「心配しなくても大丈夫ですよ。あなたのことですから」

「え？」

「ジェミニはミリアの手からカップを取るとハンカチで拭いた。気付かないうちにお茶がこぼれていたらしい。」

「本当に嘘がつけない人ですね」

「少し馬鹿にしたような物言いにむかつとしたミリアは唇を噛んだ。ジェミニはそんな膨れたミリアを愛しげに見つめる。口元からくすくす笑いが洩れる。」

「そういうところも可愛いですよ」

「そつと唇をなぞるようなくちづけの後もう一度深くくちづける。」

「ミリアはジェミニの首に腕を回した。」

「たった、それだけのことだったのに恥ずかしくて顔が赤くなる。」

「長いくちづけの後、ジェミニはミリアの耳元に囁いた。」

「そういうあなたはどうなんですか？」

「え？」

「私以外に好きな人はいなかったんですか？」

「うん」

「ミリアはジェミニの腕の中でくくりと呻づいた。」

「本当よ。ジェミニが初恋の人なの。遅いって笑うかもしれないけど」

「笑いませんよ。光栄です」

「見上げるとジェミニはなんだか切なげな顔をしていた。」

「ジェミニ？」

「いえ。ミリアは物好きだな、と思って」

「あら、みんなの見る目がないだけよ。こんなに良い男ほっとくな

んて」

ミリアはそう言うと自分からジェミニの頬にくちづけをした。右頬、左頬、それから唇にも。

「でも、他に女遊びとかはしたんでしょ？」

「ミリア。いったいどうしたんですか？」

呆れたような溜め息に、ミリアはいたたまれない思いをした。

「自分でも良くわからないの」

その時扉をノックする音がした。

「失礼しますが陛下はいらっしゃいますか？」

扉越しに声がかけられる。開けられたわけでも無いのにこんなに緊張するのは何故だろう。

「どうしたの？」

「陛下。申し訳ありませんが参謀長が急ぎお話ししたいことがあるとのこと。至急参謀室までお越し下さい」

参謀長室付の下士官のようだった。

ミリアは深呼吸をして皇帝に戻る。

「わかったわ。今、行きます」

「お待ちしております」

靴音が小さくなる。ミリアは再び深呼吸をするとジェミニから離れた。

「ちょっと行ってくるね。」

今日もジェミニの家に行っている

？

見る見る内にミリアの顔が紅潮する。

「今日は駄目ですよ。明日出立なんですから」

ミリアは慌てて同意した。

「そ、そうよね。ごめんなさい。わたし」

「代わりに私がそちらに行きましょうか？」

「え」

「冗談ですよ」

ジェミニはミリアの反応を見て楽しんでいるようだ。少し意地悪

な目つきをしている。

「ジェミニって案外性格悪いわよね。そういうところも好きだけど」  
少し唇を尖らしてミリアは呟いた。

「本当に来てくれる？ だったら門番にはちゃんと言っとくけど」

その言葉を聞いた瞬間、ジェミニは飲みかけていたお茶で蒸せていた。

「冗談 よ。でも、半分は本気かな。ジェミニが噂になってもいいって言うなら来てくれると 嬉しいな」

「ミリア お伺いします」

ジェミニはミリアの頬にくちづけ、そして耳元で囁いた。

「あなたと噂になるなら大歓迎ですよ」

ジェミニは真っ赤になるミリアを強く抱きしめた。

16：そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 2 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

最終パーティーメンバー

最終皇帝：ミリア（女最終皇帝）

帝国軽装歩兵：ジエシカ

フリーファイター：アンドロマケー

元カンバールランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダー：ソフィア

サラマットに住む女戦士、アマゾネス：テオドラ

出立日の朝、目が覚めた時ジエミニはもう隣には居なかった。眠い目をこすり起き上がると、テーブルにメモが置いてあるのが目に入る。

『おはようございます。』

気持ちよさそうに眠っていらしたので起こしませんでした。

あなたの凱旋を心待ちにしています。

ジエミニ『

ミリアはメモを胸にそっと抱く。時計を見るともう少し眠れそうだったので、横になり布団をかぶった。

ジエミニの残り香がする。

それは優しい、紅茶の香りに似ていた。

今日の出陣式では、ジエミニとゆっくり会話をすることは出来ないだろう。

だから朝、一緒に居たかったのにでも正式に婚約しているわけでも結婚しているわけでもないのに、彼と朝食を一緒にとることは出来ない。

頭ではわかっていても、残念な気がするのはわがままなんだろうか。

きっとジエミニがいたら『おはようございます』って言って優し

く頬にくちづけしてくれて、と考えたところでミリアの顔は真っ赤  
になっていた。

メモには良く眠っていたと書かれていた。

思わず顎から口元を撫でる。

( 涎よだれなんてたれてないよね )

もしかしたら大口を開けて寝ていたかもしれない。

よく、朝日で見える恋人の寝顔は百年の恋も冷ますっていうし

それくらいで嫌われるとは思えないけど、もし大口を開けて寝て  
いたとしたら、次にジェミニに会ったら必ずそのことを言われるん  
だろうな。

ジェミニって案外性格悪いから。

優しい顔をして、本当はとつてもしたたかで意地が悪くて、で  
も暖かい。

窓の外で鳥が鳴いている。

やっぱり会いたい。

ミリアはベットから起き上がると急いで着替えだした。ほんの少  
しの時間でも良いから会いに行こう。

窓を開けるとミリアは木を伝って降りていく。昔、ジェラルド陛  
下がキャットを追いかけた時のように

「ミリア？」

目の前のジェミニははち切れんばかりに目を見開いていた。

「あの、おはようの挨拶をしにきたの」

「どうぞ」

ジェミニに促されて部屋に入る。

昨日の朝にも思ったことだけれどジェミニの部屋は本だらけだっ

た。本の中で生活しているといったほうが正しいかもしれない。

魔術書、歴史書、精霊に関する書物、お茶に関する本、法学、哲学、倫理学、皇帝継承に関する研究書、果ては赤ちゃんの育て方に洋服の作り方に関する本まであった。

「朝ご飯は食べられたんですか？」

「ううん、まだ。でもお城で食べるから」

「じゃあ、紅茶でよろしいですか？」

「いいよ。すぐに戻るから」

慌てて言うと、ミリアは台所にいるジェミニに抱きついた。

「おはよう」

背伸びしてくちづける。

「用はこれだけだから」

はにかむように微笑むと、ミリアはジェミニに背を向けて帰ろうとした。その瞬間後ろから抱きすくめられた。

「ジェミニ？」

返事はない。ミリアはジェミニに抱きしめられるままになっていった。

「おはようございます」

呟くような返事が耳元に囁かれる。

「ジェミニ？」

なんとか後ろを向くと、ジェミニは泣いていた。本人もどうして泣いているのかわからないのだろう。訝しそうに自分の涙を拭き取っていた。

「わ、わたし、なにかした？」

「違います すみません」

ミリアはじつと彼を見つめた後、椅子に腰かけるように促した。椅子に腰を下ろした彼の目の前に立ち、そっと彼の頭を抱きしめる。

「ミリア？」

「黙ってて」

彼の耳が自分の左胸にくるようにしてから囁いた。

「心臓の音、聞こえる？」

ミリアはジエミニの頭を抱えたまま、彼の返事を待つ。  
柔らかい沈黙。

自分の胸の中にいる彼は、なんだか小さな子供のように感じる。

「聞こえます」

「昨夜ね、わかったんだけど、人の心臓の音って聞いてると落ち着くのよ」

昨夜　自分の心音を聞いて彼女がそう感じた。とわかったジ

エミニは顔が赤くなるのを押さえられなかった。

彼女の手がゆっくり自分の頭を撫でる。

少し高めの体温、柔らかく華奢な身体、そして少し速めだが確かに脈打つ心臓の音。

できればずっと抱きしめられていたかったがジエミニはそれが出来ないことを知っていた。

「もう、大丈夫ですよ　　どうして涙が出たか今、わかりましたし」

名残惜しかったがそつと彼女の腕を外し、ゆっくり立ち上がった。目の前のミリアはまだ心配そうな顔をしている。微かに洩れる笑み。

「あなたが来てくれて、嬉しかったんです。私は、今までこんな風にまっすぐな愛情を受けたことがなかったから　　」

顔を赤くするミリアに囁きながらくちづける。

「私は、親から冷たい仕打ち以外を受けた記憶が無いのです。だからあなたの気持ち信じられない部分が少しあった　　そして自分の気持ちの本物なのかも、いまいち自信がなかった。昨夜もあなたとそのままずっと一緒にいられば良いと思いましたが、それが子供のような独占欲なのか、愛情なのかわかりませんでした」

ミリアは唇を噛み、下を向く。

「それで　　？」

泣きたいのをこらえている。そんな無理をしているのが手に取る

ようにわかる。

いつもミリアは感情がそのまま表情に、声音に、態度に出る。そこを可愛らしいと思ひ、羨ましくも思っていた。

「あなたを愛しています。私は臆病者だから、あなたに気持ちを伝えるのが怖かった。ただの相談役として側にいられるだけで十分だった。そう無理に思うようにしていたのですが　だからあなたが今、訪ねて来てくれた時、自分の目が信じられなかった」

また、瞳から涙が零れ落ちる。

それでもジエミニは話を続けた。

「あなたの気持ちを信じられなかったというのは、裏返せば自分に自信がなかったからです。私は必要の無い人間でいる時間のが多かった。私が生きていようが、死んでいようがみんなには関係の無いことだった。そんな風にしか考えられない、卑屈な人間な私をあなたは必要だと感じてくれた。それが嬉しくて仕方がなかったんです」

ミリアの小さな手がジエミニの背中を撫でるように抱きしめた。

そつと彼の胸に頬を押しつける。

「そつよ。私にはジエミニが必要な　あなたの私に対する気持ち、ただの独占欲でもなんでも構わない。でも、私はあなたが好き。それだけは忘れないで」

ミリアの顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

「だから自信を持って、もし私が死んでも次の恋を探して、幸せになつて」

「なつ　！」

なにを言うんですか。と言おうとしたが、彼女の悲痛な顔と激しく頭を振る動きに、ジエミニは言葉を続けることができなかった。

「お願い、約束して」

ミリアはジエミニ胸の中で嗚咽を漏らしていた。

「嫌です。できません」

ミリアがはつとするように顔を上げた。

「あなたが私に幸せになつてほしいと思うのなら、生きて戻つて下さい。私はしつこい人間なので、これから先あなた以上に愛しいと思う人に、もし出会つたとしても認めることができないでしょう。だから私を幸せにできるのはあなたしかいないんです」

ミアの顔が苦笑で歪む。

「だから、待つています。あなたが戻るまで、ずっと」

彼女の口元から苦笑が洩れる。

「もしも戻らなかつたら？」

「そうですね　どこかの村で子供達に魔術や勉強を教えながら、あなたのことを思い続けて静かに年を取りますよ」

「やだ」

「やだじゃありませんよ。私は本気です」

「だって」

「だってじゃありません。村の子供達に『また同じ話してる。もうソラで言えるくらい聞いてるよ』って呆れられるくらい同じことをくり返す老人になりますからね」

「あは。やだ」

こらえ切れないようにミアが涙をぼろぼろ流しながら笑っている。

「なんか、その姿が想像出来ちゃう」

「想像だけにさせて下さいよ。現実になってしまったら困ります」  
自分の胸の中で彼女がこくりと呻づく。

二人の唇が重なる。

その時。

「ジエミニ！　陛下いらっしやる？」

突然扉がバンバン叩かれた。

外でアンドロマケーが叫んでいる。

そのことにジエミニも気付いているはずだが、彼はミアの唇を塞いだまま、対応しようとしめない。

(ジエ、ジエミニ?)

ミリアは彼の胸を軽く叩くが無視される。

やっと長いくちづけから彼女を解放したジェミニは、ミリアに照れたような笑いを向けると、扉を開けた。

扉が開いた途端アンドロマケーがだかだかと中に入ってきた。

「陛下！ 出陣式に遅刻するおつもりですか！！」

あまりの剣幕にミリアはとっさに返事を返すことができない。少しの沈黙の後、小声で謝るくらいしかできなかった。

「ごめんなさい」

「まあ、まだ間に合いますから構いませんが      ジェミニ、せつ

かくの別れの挨拶を邪魔してごめんなさいね」

「別に良いですよ。ちゃんと挨拶は済ませましたから」

ジェミニが意地の悪い笑顔を返す。

「本当に陛下ってば物好きなんだから」

アンドロマケーの呆れた口調にミリアは速攻で返事を返していた。

「あら、アンドロマケーの見る目がないのよ！ 損してるのはあなたなんだから！！」

アンドロマケーは少し目を見張った後、楽しそうに笑っていた。

ミリアは顔を赤くして、ふてくされたような気恥ずかしいような顔をしながらアンドロマケーを睨み付けた。

そんな二人を見つめているジェミニは、照れたような苦笑を浮かべている。

「あはは。陛下にはかないませんわ。私の負けです」

降参をするようにアンドロマケーは軽く両手を挙げた。

それでもまだ笑いは収まらないらしい。

「さあ、陛下。出立の準備に戻りましょう。これ以上遅れると、ジイ軍団に殺されてしまいます」

「大臣たちって言いなさいよ」

「じゃあ、ジェミニ。陛下お借りするわね」

「無事に返して下さいよ」

本音をアンドロマケーに伝える。

アンドロマケーは真剣な表情のジェミニを見て、瞳を瞬かせてから同じように表情を引き締めた。

「善処するわ」

そうとしか言えない。

「私はものじゃないってば」

怒りだすミリアを引きずる様に、アンドロマケーはジェミニの宿舎から王宮に向かって歩きだした。

途中まで見送りながらジェミニは彼女の姿を忘れないように、その姿を脳裏に焼きつけるように、ミリアの姿を見つめた。

「ここまででいいよ」

「はい。ミリア、お帰りをお待ちしています」

「うん、またね」

ミリアはなるべく明るくジェミニに言い返した。笑顔でいないと泣いてしまいそうだったから

「なんか、男女逆ですね」

アンドロマケーが呆れたように言うのに、笑顔がちゃんと返せることができたか、今一步自信は無かったけれど。

「じゃあ」

「はい、お気をつけて」

二人は軽くくちづけて別れた。

お互いに、この別れの言葉が最後にならないようにと祈りながら

17:そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 3 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

最終パーティーメンバー

最終皇帝：ミリア（女最終皇帝）

帝国軽装歩兵：ジエシカ

フリーファイター：アンドロマケー

元カンバールランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダー：ソフィア

サラマットに住む女戦士、アマゾネス：テオドラ

「なんだか、ジェミニ変わりましたね」

「？ どこが？」

相変わらずアンドロマケーに引きずられるように歩いていたミリアは、驚いたように彼女を見返した。

アンドロマケーは微かに眉をしかめた。

「前はあんなに、考えが読めなかったんです。なんて言うか、顔は笑っていても心は笑っていないというか、柔らかい物腰とは裏腹にとっても冷たいイメージが」

呟いた後に、彼女は言い過ぎたと思ったのか肩を軽く竦めた。

そんなアンドロマケーを見詰めて、ミリアは瞳を瞬かせる。

「そう？ ジェミニはいつも暖かい感じだけど」  
言ってから首を捻った。

いや、いつもとは限らなかった気がする。

うつむくと首を捻るミリアの肩を軽く抱いて、アンドロマケーは優しく微笑んだ。

「それはあなたが『特別』だからですよ」

目を睜<sup>みは</sup>る。

特別。

「だったら嬉しい」

アンドロマケーの囁きに、ミリアはこちらが照れるような満面の笑みを返していた。

からかって遊ぼうと思っていたのに、思ってもいない切り返しがあったことにアンドロマケーは苦笑する。

「ああ、もう！ 朝からごちそう様です！...」

「どう致しまして」

悪戯っ子のような口調にむっとしたアンドロマケーは、自分の上司だということも構わずに手を出していた。ミアアの頭はぱこんという小気味のいい音がする。

「いったあー」

ミアアは大げさに頭を抱えた。

アンドロマケーの表情は明るい。

「ほら、急ぎますよ」

慌てて、二人は元気に駆け出した。

城に戻ると大臣たちの小言が待っていた。

アンドロマケーのように彼らのことを『ジジイ軍団』と叫びたいくなるのはこんな時だ。

しかし、今は黙って聞くしか対処法はない。

そんな時に、神の声があった。

「大臣のみなさま方、申し訳ありませんがそろそろ陛下を解放して頂けませんか？ 最終チェックをして頂きたいんです」

その神はソフィアだった。

「お小言の続きは、わたくしが道中でじっくり代わりに致しますから」

が、神はただ優しいだけではなかった。

にっこりと優しいげに微笑む姿が恐ろしく見えるのは、幻覚ではないはずだ。

こうして、ミアアのお小言担当は大臣たちからソフィアに継承された。こんな継承はやめてもらいたい。ミアアは心の中でそう呟く。げんなりとしているとやわらかい声がかかる。

「陛下、早くいらして下さい」

ソフィアの背中を、駆けるようにミリアは追いかけた。

「最終チェックって？ 準備は昨日で終わったよね？」

「出陣式用の衣装の試着です。あなたが太っていらしたら、直さなければいけませんから」

ソフィアはにっこり笑顔でとんでもないことを言う。

「いつもの格好で良いじゃない」

太ったわけではないが、思わず言い返す。

するとソフィアが珍しく苦笑を零した。

「わたくしもそう申したのですが『儀式には、それなりの衣装を身につけなければならぬ』ということ、とても実戦向きではない、豪華な衣装を用意して下さったのですよ」

ミリアは眉をしかめた。

こういう、無駄な出費を許可する大臣たちの思考回路を覗いてみたいものだ。これだけ派手に出陣式をして、もし全滅したらどうする気だろうか？

もし、全滅。

自分の考えにミリアは頭を振った。

今からこんな弱気でどうする。

私は絶対に生きて戻る。

ジェミニを寂しいジイさんにしないために、生きてここに戻らなければならぬ。

『もし』なんて思っちゃ駄目。

大臣たちが用意した『実戦向きではない豪華な衣装』は、本当に実戦に向いていなかった。

真っ赤な、身体に吸いつくような衣装は小手も脛当ても胸板すらない。

これではすぐにやられてしまう。

大柄な黄色の模様が入っているのも戦闘向きではない。

普段着ている鎧もピンクだから、色に関してはあまり文句を言う資格はないのだけれど

髪の毛頭の頂点で変な髪飾りで飾る以外は流したまま。これでは髪の毛が目に入って邪魔でしょうがないと思う。戦闘は汗をかくものだ。その時に髪の毛が目に入ったら？ 想像しただけでうんざりしてしまう。

「うっとうしい」

「！ 申し訳ありません、陛下」

「は？ 違うわよ。あなたのことじゃなくて、この髪の毛のこと」  
思わず文句を呟いてしまったミアは、慌てて側にいた侍女に言い訳した。

おちおち文句も言えやしない。

ミアは溜め息をついて立ち上がった。

「さ、さっさと出陣式済ませて着替えましょ」

幸いなことに、側にいた侍女はミアの一人言を聞かない振りをしてくれた。

「我はここに宣言する。七英雄を必ずや打倒し大国の礎いしづえとせんことを！」

大広間にミアの声が響く。

愛剣ムーンライトを高く掲げて一振りし、鞘に納める。キンとい

う澄んだ音を合図に、またユリシーズが大声で先導する。

「ミリア陛下、万歳！」

「万歳！」

ミリアは軽く手を振りながら、笑顔を振りまきながら階下に下りていく。

城を出ると、そこには溢れんばかりの民衆が押し寄せていた。

「陛下！」

「ミリア陛下！」

集まった人々が口々に自分の名を叫ぶ。

それは少し寒かった。

気温がじゃない。

自分にかかる、過度の期待への肌寒さ。

それでもミリアは顔には笑顔を浮かべ、手を振った。向く先々で歓声が揚がる。

大臣たちが馬を引いてくる。

門に向かい道が開け始めた。

民衆がまるで波のように彼女たちを通すために道を開く。

ついに、出発だ。

「陛下、馬に乗ったら出発の掛け声をお願いします」

手綱を渡しながら一番年長の立派な白い髭の大臣が言う。

(ジェミニ　　出発前にもう一度会いたかったな)

呻づいて手綱を取ろうとした瞬間、正門の側の木の下にアバロンに帰る度に一緒に遊んでいる子供たちと、ジェミニの姿があった。

「陛下ー！」

子供たちが一斉に駆け出してきた。

「ジェミニ、みんな」

「へいかー！　これ、みんなから」

サラが羊皮紙の包みをミリアに渡そうと腕を伸ばす。その小さな女の子を、ジェミニが抱き上げてミリアと視線が合うようにしてく

れた。

「決戦前の食事の時に、みんなで食べて下さい」  
子供たちのきらきらした瞳が見上げてくる。

「陛下、悪い人たちをやっつけてきてね!!」

「頑張つて!!」

「無事に帰ってきて、お話聞かせて」

「みんな」

まずい。涙腺が決壊しそうだ。

ミアは懸命に瞬きをして涙を押し返そうとするが、無理そうだ。  
どうしよう。

そう思っているとジェミニの腕の中にいたサラが「ジェミニさま、  
降ろして!!」と訴えた。ジェミニは苦笑して彼女を降ろすと、子  
供たちにとんと背中というか腰や足を押されてミアの正面に立つ。  
泣きそうな目尻にジェミニがくちづける。左、右と。

先程の挨拶が最後になるかと思っていたのに。

公衆の面前での恋人同士のような仕様に、ミアは体を固まらせ  
た。

びっくりして涙も止まる。

「あなたは いえ、あなたたちは七英雄と違って、必要とされ  
ています。確とした絆があります。あなたが英雄だろうと関係  
がない。待っています。あなたたちの無事を心から祈っています」

「ジェミニ」

恋人の名前をミアが呼んだ時、背後の人ごみがざわついた。

丁寧な言葉を発しながらも群集を掻き分けてくる人がいた。

「トーマ」

後ろにいたソフィアが口元に両手をあてて立ち竦む。

18：そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 4 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

最終パーティーメンバー

最終皇帝：ミリア（女最終皇帝）

帝国軽装歩兵：ジエシカ

フリーファイター：アンドロマケー

元カンバールランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダー：ソフ  
イア

サラマットに住む女戦士、アマゾネス：テオドラ

ミリアの両肩に手を置いていたジェミニが離れて、トーマと呼ばれた青年の前にミリアを押し進める。

「ミリア陛下、ご挨拶が遅くなり申し訳ありません。今日が出立の日と聞き、駆け付けて参りましたが、海が荒れてしまいました。ずっと膝を突いて挨拶をする。」

白を基調とした緩やかな衣装、青く高い帽子。

代々カンバーランド領主が引き継ぐ衣を纏った、青年という年齢に達したばかりのトーマは顔を上げて微笑を浮かべた。

カンバーランドはバレンヌ帝国の領土の一部ではあるが、代々の皇帝は絶対服従を要求しなかったため声をかけるまで顔を上げてはいけないということはなかった。

カンバーランドだけでなく、すべての領土に対してバレンヌ帝国は平等の姿勢を崩したことがない。

「トーマ殿、わざわざありがとうございます」

ミリアは答えつつも、トーマの視線が後ろにいるソフィアに注がれていることに気がつく。

ジェミニの顔を見上げると、彼はなんだかほっとした表情をしていた。

「ソフィア」

ミリアは、後ろで呆然としたままの彼女に声をかける。

「トーマ殿は、あなたに会いに来られたのですよ」

詳しいことは聞いていないが、二年前の継承問題で初代のカンバーランド<sup>ホーリーオーダー</sup>聖騎士のソフィアと同じ名前を持つ彼女と、初代カンバーランド領の領主トーマと同じ名前を持つ従弟のトーマは、一人の青年の死によって交流が途絶えていたという。

それは、マグノリアの記憶の中にあった、白い霧<sup>もや</sup>に包まれた曖昧な映像。

バルンタインという名の聖騎士ホーリーオーダーの死。

まるで、初代の再現のような悲劇。

千年近く前の悲劇の時には誰も死ぬことなく、三兄弟の兄と姉が聖騎士となり、末弟が領主となって問題は収束に向かった。

だが、二年前はバルンタインが若くして命を落としたのだ。

バルンタインとソフィアは親同士クワンの約束での結婚を控えていたという。

ミリアの勘が正しければ、彼を呼んだのはジェミニ。

思い浮かぶのは、ソフィアがいつも称える淡い笑み。

まるで、なにもかもを　　未来を諦めたかのように浮かべられる穏やかな笑み。それを、トーマが変えることができるのなら。

ミリアは固まったまま動こうとしないソフィアの背中を、そっと押した。

そして傍を離れてジェミニに近付く。

跪いていたトーマが立ち上がり、ソフィアの左手を取った。

その様子を見守りながら隣のジェミニに声をかける。

「ジェミニが呼んだの？」

咎めるつもりはなかったが、真意が知りたかった。

ジェミニの周囲にいた子供たちがミリアの傍に集まってくる。ソフィアとトーマが語り合っている様子を見て、もう少し話しかけて

もいいと思ったのだろう。

「へいかー」

一番小さな男の子のジャンが両手を広げてミリアに微笑む。これは抱っこしての合図だ。

ミリアは思わず微笑を返して小さな体を抱き上げた。

温かい。

温かくやわらかい体を抱き締める。

「あなたと最終戦を共にするメンバーが、誰か一人でも『共倒れでもいい』と考えたら困りますから」

「え？」

ジェミニはミリアに抱きつくジャンの頭を撫でる。

なんとなく、手つきがいつもより雑なのは気のせいだろうか。

「メンバー全員に、必死で生きて戻ると思ってもらわなくては困ります」

むすつとした口調に笑みが零れる。

「淋しい老後を送らないために？」

「送らないために」

ぼそりとした答えに被るように、サラとポリーがミリアのマントを引く。

「どうしたの？」

「ねえねえ、へいか。ジェミニさまとけっこんするってホント？」

「結婚するの？」

きらきらした瞳が見上げてくる。

眩しい。

思わず瞬いてジェミニを見上げる。

ミリアはジェミニのことを子供たちには話していない。正確に言えば話すような暇などはなかった。

見上げてくるミリアを見て、ジェミニは苦笑を零す。

「私ではありませんよ。たぶん、あなたのおせっかいなお友達です」  
ミリアは溜息を吐いた。

その溜息を聞いて、子供たちが瞬きをする。聞いちゃいけなかったの？ という雰囲気はジェミニが屈みこんだ。

「まだ、みんなには内緒ですよ」

につこりと笑って口元に人差し指をあてる。  
「内緒？」

「戦いが終わってからいろいろありますから、ちょっと先の話です」

「じゃあ、その時はあたしたちがベールを持っていい？」

「サラもー!!」

「あー、ずるいー!!」

サラとポリー以外の女の子が声をあげる。

ペールを持ちたい、花片はなびらを撒きたい、ブーケが欲しい。そんな口々に零れ出る微笑ましい希望に心の中が暖かくなる。

けれど、どう答えたらいいのか

だけど、こういうことに一番上手にあわせられるのはきつとジェミニだから、とりあえずは口を噤んでいよう。そう思ってミリアはゆったりと笑って屈んでいるジェミニを見詰めた。目線で、まかせた。と合図を送る。

「ミリア、二人の問題でしょう？」

サラに背後からよじ登られているジェミニは、見上げて苦笑を零す。

「そうだね。でも、わたしはよくわからないから、帰って来るまでにジェミニとみんなで決めておいて」

ミリアの言葉に、子供たちの歓声が湧く。

「ミリア、本当に無意識って怖いですね」

ジェミニの咳きにミリアは小首を傾げる。

ふとソフィアを見るとトーマとの話し合いは終わったようだ。彼女

の左の薬指に、スターストーンストーンの指輪が煌いていた。

ミリアは腕の中のジャンに笑いかける。

「もう、行くね」

そして、彼を降ろして、立ち上がったジェミニを正面から見詰める。

口元を引き締めて、そして笑う。

「いってきます」

「いってらっしゃい。ご無事の帰還を、心からお待ちしています」

「うん」

「陛下、お待たせいたしました」

震えるような声に振り返ると、そこには顔を真っ赤にさせ動揺したソフィアがいた。

「ううん。トーマ殿との挨拶は、もういいの？」

「はい。ジェミニ殿の策に嵌ったのは不本意ですが、たつぷりと心残りをご用意いただいたので、全力で生還を目指しますわ。再会したらいろいろと話し合うつもりです」

「それはよかった」

ジェミニがにっこりと笑う。

「ジェミニとソフィアって似てるよね」

「似ていません」わ」

ほぼ同時に返ってきた言葉にミリアは吹き出した。

「やっぱり、似てる。じゃあね」

ミリアは苛々した雰囲気醸し出している大臣から手綱を受け取った。

五人が騎乗したのを確認して「出発！」と声をかける。

「ソフィア！！」

トーマの呼び掛けに、自分が呼ばれたわけじゃないのに思わず振り返ってしまう。

そこにはトーマが懸命にソフィアに手を振っていた。そのトーマに小さく手を振り返すソフィア。トーマの隣でサラを抱き上げているジェミニ。彼らの背後にはアバロンに住む民や、部族代表の者たちが揃っていた。

ここで、こんなふうに声をかけるのは自分本位だ。

彼を縛り付ける行為だ。

わかっているが、ミリアは振り返ったまま叫ぶ。

「ジェミニ、帰って来たら結婚式よ！ 幸せになろうね！！」

ミリアの声で歓声が止んだ。

ジェミニがその言葉に返すかのように「わかりました」と叫んで手を振り返す。

それと同時に、再び歓声が湧いた。

先程とは違い、二人を祝福する歓声が。

「はい！！」

ミリアは声をあげて馬を走らせる。

そのミアの後を、メンバーの四人が笑いながら追い駆けてきた。きつと、バレンヌに戻ったら今日のことをジェミニにもものすごく責められるだろう。

そんな未来が、現実になりますように。

19：そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 5 - (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。あらかじめご了承ください。

ゲームにはない設定が作られているところもあります。

最終パーティーメンバー

最終皇帝：ミリア（女最終皇帝）

帝国軽装歩兵：ジエシカ

フリーファイター：アンドロマケー

元カンバールランド王族の血統の聖騎士、ホーリーオーダー：ソフ  
イア

サラマットに住む女戦士、アマゾネス：テオドラ

漆黒の闇に続く長い階段が目の前にある。

ここまで来るのに、上へ登ってきたのか地下へ降ってきたのか、すでにわからなくなっていた。

暗い、圧迫するような空間。悲しみ、憎しみ、恐怖、そして狂おしいまでの過去への羨望に満ちた空間。

そしてこの先に未来の『わたし』がいる。

「陛下、ここで少し休みましょう」

アンドロマケーの声で、ミリアは暗くなりつつある思考から解き放たれた。

「そうね。万全を期して戦いを挑まなければ、七英雄に失礼だものね」

「失礼って、陛下」

「ある歴史家は、この戦いを『過去の英雄と今の英雄の戦い』と呼んでいるそうですね。これから戦う方達は、わたくし達の未来の姿なのかもしれませんわね」

「ええ、わたしが彼らのような立場にいつ立っても、不思議ではないもの」

「ちよつと、二人ともなに言ってるのよ。縁起でもない この変な景色に毒されてんじゃないわよ」

遣る瀬ないアンドロマケーの言葉にミリアとソフィアは目を合わせ、そして軽く呻づきあった。今、士気を低めるべきではない。

「ごめんなさい お腹もすいたことだし、ご飯の準備をしまし  
ようか」

「そうしましょうか」

ソフィアが答える前に、テオドラとジェシカが食糧を取り出していた。

固く冷えたパンに干し肉、チーズ。そしてワイン。もしかして、これが最後の食事になるかもしれないと思うと少し寂しかった。

5人とも黙々と流し込むように食事をした。

(決戦前の食事時にみんな食べて下さい)

ふと、ミリアはジェミニの言葉を思い出した。自分の荷物から羊皮紙の包みを取り出す。

「これね ジェミニと子供たちからの差し入れ。みんなで食べましょう」

かさりと音を立てて中味を取り出す。

包みから出てきたのは、色とりどりのクッキーとコイン、折り鶴、そして小さな手紙だった。

『みなさん

このコインはジャンが一生懸命貯めたお金です。

これを使って武器を買って必ず勝って下さいとのことですよ。

折り鶴は、子供たちに私の故郷では必ず勝つための

おまじないだと教えたならマリーとア・サーが折ってくれたのです。

クッキーはサラとポリーと作りました。

それから子供達からの伝言ですよ。

「必ず勝ってわたし達が一番にお話して下さい。待っています」

みんな、あなた達の帰りを待っています。

頑張ってください」

わたしは最後まで泣かずに文章を読むことができなかった。

読み終わってすぐに左隣にいたアンドロマケーに渡す。

手紙は、次々と無言で回された。

みんな言葉が出ない。アンドロマケーなど涙で顔がぐしゃぐしゃ

だ。

「思いがけない、嬉しい差し入れですね」  
そういうジェシカの言葉も少し震えていた。

正直言つて最後の迷宮の雰囲気にもんな飲まれていたのだ。口では明るいことをいつていても不安で押しつぶされそうになっていた。こんな巨大な迷宮を創造できる怪物と戦つて勝ち目はあるのか。もし、力及ばずとも相打ち覚悟で戦いを挑むしかない。もうみんなの顔を見ることは出来ないかもしれない。そんな心の片隅にあった不安に、知らず知らずの内に心を奪われていた。

あなたと最終戦を共にするメンバーが、誰か一人でも  
共倒れでもいい』と考へたら困りますから。

出立の日にジェミニが呟いた言葉。

相打ちでもいい、共倒れでもいい そんな気持ちで臨んでいたら、勝てるものだって勝てなくなる。

ミリアはおどろおどろしい、まるで邪悪の神の神殿の供物台のような階段を見上げる。

きつと、あそこにいる 七英雄は。

「どうして、七英雄はこんなものを作ったんでしょうね」  
アンドロマケーがぼつりと呟く。

「え？」

左隣を見上げると、真っ赤な瞳をしたアンドロマケーが袖で乱暴に涙を拭っていた。

「七英雄だというのなら、そしてあんな巨大な力を持っているなら強引に街や村を襲つてしまえばいい。あいつらくらいの実力ならそうすれば簡単に世界なんて手に入るんじゃない？」

「本当は 世界征服など興味がないのかも」

ジェシカの呟きにアンドロマケーが小首を傾げた。

「興味がない？」

怪訝そうに呟き返す。

「ロナルドが ヤツは歴史にも詳しいから、七英雄は過去の仲

間である古代人たちの元へ戻る手段を探していて、この世界などには興味がないという説があると聞いていた」

「その話は、わたくしも聞いたことがありますわ。だから遺跡や歴史建造物、歴史的に古い場所などに現れるのだと」

ソフィアも涙を拭いながら言う。

「その、古代人たちは奴らを受け入れてはくれないだろう？」

テオドラが赤い戦衣を指でもてあそぶ。

「忘れられた町トレンスでのことを考えたら、受け入れるつもりも、過去に彼らに守ってもらったこともなかったことになるんだらうね」

アンドロマケーが吐き出すように言う。

「ねえ、七英雄に同情する？」

ミリアは意を決して仲間に問い掛ける。

巨大な力を持って、仲間に裏切られ、残された一部は力の収集・力の誇示に無意識に踊らされている　七人いても、個々での英雄でしかなかった七英雄。

ミリアの問い掛けに四人は顔をそれぞれ見合う。

ふつと微笑んでソフィアがミリアの頬を撫でる。

「同情など、彼らは望んでいないでしょう。今、わたくしたちの世界はひとつだけ。興味がないかもしれない七英雄と、この世界を、みんなを守りたいわたくしたち。どちらが生き延びた方が無難なのかなど自明の理ですわ」

「陛下。あたしたち五人で彼らの弔いはしましう。余計な情けなど、きつと邪魔なだけです」

アンドロマケーがにやりと笑う。

「私たちを待っている人がいる。その人たちのために負けません」  
ジエシカが金貨を手にして微笑む。

「七英雄は死を覚悟しているのでしょう。このような迷宮など作ることに力を割くような者たちに負ける謂れはありません。我々は害獣を駆除する狩人です。身勝手な言い方もしませんが、サラマツトでは害獣を駆除したらその骸はすべて有効活用します。七英雄

「といえど同じこと」

テオドラがクッキーを口の中に放り込んでくつりと笑う。

「そうだね」

光と闇。

正義と悪。

白と黒。

そんなふうに関り切って、倒すべきものだと言いつ切るのは難しい。特に、長命種たちの自分本位な行動を知った今となっては心が揺れる。

でも、わたしたちには待っている人たちがいる。

絆があると言ってくれる人がいる。

必要だと、言ってくれる人がいる。

「わたしたちは、わたしたちの身勝手に彼らを倒そう。みんな、待っていてくれる人の元に無事に戻ろうね」

「ええ。生還したら立て続けに結婚式ですね!!」

「これだけ頑張ったんですから、ドレス代は帝国予算でよろしくお願ひしますよ、陛下」

「えー。ムリ　あ、でもわたし用の予算があったから、それでいけるかも」

ミリアはアンドロマケーの冗談めかした提案に真顔で考え込む。

「陛下、わたくしは見世物になるのはごめんですから、真面目に考え込まないで下さいませ」

ソフィアがスターストーンの指輪をした手のひらを頬にあてて苦笑する。

そのスターストーンがミリアには眩しく映った。

20:そして、語り継ぎ歌い紡がれる - 6 - (最終話) (前書き)

このお話はロマンシング サ・ガ2の二次創作になります。

ゲームの二次創作という関係上、ゲーム部分は省略しております。

話はかなり飛びますが、あらかじめご了承ください。

七英雄との戦いから一年が過ぎた。

最終決戦は総力戦だった。

ロックブーケの魅了術『テンプレーション』の見切りができないために、数代前からパーティーは女性ばかりだったが、その女性特有の体力のなさが危うく命運を左右するところだった。

時を操る水の最高魔術『クイツクタイム』。先制攻撃を可能にする陣形『ラピッドストリーム』。寒さが苦手なワグナスを倒すために優先して身につけた必殺技『乱れ雪月花』。

魔力も体力も気力も、本当に残ったのはわずか。

亜空間に浮かんだ仮面。

血の涙。

ひび割れ、壊れた

なんとか迷宮から這い出して、見上げた空に吸い上げられたかのように消えていった七英雄。

眩い光。

暖かな黄金色の煌き。

雲に乱反射する輝き。

あの、美しくも物悲しい風景を私は忘れない。

戻ってきてからは、バレンヌ帝国を共和国にするための作業で手一杯だった。

共和国にすることを宣言して退位。

だけれど、共和国にするための指導者は必要だということ、各国の代表者たちの総意でミリアが執務者として立つことになってしまった。

議会を設立。

選挙制の周知徹底。

やることはいっぱいあるけれど、あれもこれもとミリアが元皇帝がしてしまえば、それは専制政治と変わらない。それでは駄目だ。

「ミリア。おかえりなさい。今日はお早いですね」  
自宅に戻るとジェミニが夕飯の支度をしていた。

これも見慣れた風景。

本だらけのジェミニの部屋で、ミリアは新婚生活を送っていた。  
「うん。ただいま」  
駆け寄って抱きつく。

これではまるで、帰って来たお父さんに抱きつく子供みただと思っけれど、今日は特別。

「ジェミニ、嬉しいお知らせよ」  
「お知らせ？」

首を傾げるジェミニに、ミリアは手に入れたプレートを見せる。

「じゃーん！！ 巡見使の称号を手に入れました。二人分！！」

「本当ですか？」

「ホントよ。条件はこっそりと出て行くことなだけだね」  
そんなのは条件とは言わないだろう。

元皇帝が巡見使として諸国を巡る　それを民衆はどう思うの  
だろうか？

だが、これは元皇帝自身が望んだこと。

「あと、ジェミニには各国の教育の現状を調査して報告書を提出するようにですって。大丈夫？ 面倒だったら断っておくけど」

現在、ジェミニは元帝国が発案した連合教育機関で子供への勉強の教え方や、怪我などの応急処置、心理的なことへの対応などを現場で学んでいた。教師、薬師、魔術師の三役を兼ね備えた連合教育師という職業の第一期生になることが決まっている。

「じゃあ、いよいよですね」

「うん。まずはヤウダだよね！」

ミリアが頬を上気させて頷く。

ジェミニの生まれ故郷、ヤウダ。

遠い、木と土と紙の国。

「ええ。ヤウダへ行つて、その後はあなたが見たい国へ行きましょう。皇帝たちの記憶でだけの場所も多いでしょう？ そういう国をいろいろと見て回つて、少しずつ滞在して、子供たちと仲良くなつて 楽しみですね」

「モンスターがまだ出るようだったら退治して、教育状況を見て、報告書を出して、種族の均衡を見て、周囲との問題がないかも把握して」

難しい顔をしてから、ミリアはぱつと顔を輝かせた。

「美味しい料理を食べて、美味しいお菓子を食べて、美味しい果実を食べて、綺麗な景色を見て、珍しい遺跡を見て、人が踏み込まない秘境へ足を伸ばして、面白い動物と会えるといいね。はぐれモンスターも、人間と仲良くなれそうな種族がいたら折り合いの方法を探すのも楽しそう！」

にっこにこと『楽しい』未来を思い描く。

そんな彼女を見て、ジェミニは微笑を深くする。

本当に、ここでの バレンヌ元帝国首都、アバロンでの生活は終わるのだ。

待ち望んでいたはずなのに、いざ近付くと不可解な気持ちになる。けれど、この先は二人一緒なのだ。

不可解ではあるけれど、不満などひとつもない。

「そういえば、肖像画の件　　未だに私の元に説得しると要請が来ますよ」

ほんとミリアの頭に手を置く。

父母の形見という髪飾りは、今は大事に宝箱の中に入っている。

今のミリアの後頭部はジェミニがプレゼントした手彫りの木のバレッタが飾られている。長いみつあみはぱっさり切られて肩にかかるくらいになっていた。

「えー、まだ？」

ミリアがげんなりとした顔をする。

元王宮の大広間に飾られた代々の皇帝たちの肖像画。

そのうち、最終皇帝の肖像画だけが未だに描かれていないのだ。

「ええ。全部が揃っていないのは気持ちが悪いと」

くつりと笑って言えば、ミリアは唇を尖らせる。

「そんなの収集癖みたいなものじゃない。返ってないほうが話題性があつていいでしょ」

「元王宮以外での偶像崇拜の禁止。過去の皇帝たちの虚飾の禁止。

退位後十年経ていない皇帝の伝記の作成の禁止　　でしたっけ？」

台所に歩を進めるミリアの後ろをついて歩きながら、苦笑する。

「そうよ。だってバレンヌは帝国じゃなくて共和国なんだもの」

仕込中のスープの鍋を覗き込んで顔を綻ばせる。

本当に感情と表情が直結している。

「　　みなさん一緒に描いてもらったらいかがですか？　　再び集

まるのは難しいかもしれませんが」

「みんなで？」

「ミリアは内心、自分だけで七英雄を倒したんじゃないと思ってるんでしょ？　　さすがに狭いキャンバスに全国民を描くのは難しいですが、五人くらいなら入るんじゃないありませんか」

ジェミニはエプロンを手にするとミリアに手渡す。

ミリアは小首を傾げながらエプロンを受け取る。

「五人か ソフィアは嫌がりそうだな。でも、いいね。全国民を代表して五人っていうのなら、いいかも」

肖像画の話は即位した頃からずっと出ていた件だ。

なんやかんやと言って先延ばしをしていたのだが、歴史書を編纂するために正確な資料がいるから、肖像画を完成させたいと歴史編纂部から再三の嘆願が来ていた。

それを無視して、七英雄の正確な肖像画を描かせたのがまずかったのだろうか。

だが、実物と相對したところのある自分が彼らの真の姿を教えなければ、恐怖の対象としてのおどろどろしい印象ばかりが残ってしまう。

ノエルは格好よかつたし、ロックブーケは魅了術なんて必要ないくらいの美人さんだった。ワグナスの凍るような美貌、クジンシーの陰鬱な表情、スービエの冷徹な姿、ダンターグの勇猛な姿、ボグオーンの冷静な戦闘タイプを感じさせないひょうきんな姿。

なんだから、説明する時に「まるで仲のいい友達の説明をしていらっしやるようですね」と画家に言われたのが懐かしい。

ミリアは水道で手を洗って、サラダを作るのを手伝う。

「じゃあ、もし私の方に話が来てしまつたら最終パーティ全員なら可能性がある」と告げておきますので、それまでにソフィアの説得をしておいて下さいね」

トマトを切りながらジェミニが笑う。

「うわ。ムリ。だって、ソフィアつたら未だにトーマの求婚に、首を縦に振らない頑なさなのにな」

「ああ。照れ屋さんですからね、ソフィアは」  
そういう問題だろうか。

本当にソフィアとジェミニは似ている。

「やっぱり、結婚式の準備をこつそりして、今日結婚式だから作戦が有効かしら」

むむ。と呟く。

その眩きに、ジェミニが呆れた表情を顔に載せる。  
「ですから、私とソフィアはそんなに似ていません」  
むっすりとジェミニが答える。

ジェミニとミリアの結婚式は子供たちの主催であっという間に決まっていた。

「ジェミニ、明日ね、結婚式だから」

あの時の、口も目もぼかーんと開いたままの表情は本当に面白かった。

小さな教会での結婚式。

神官様も誰が結婚するかというのを知らされていなくて、わたしを見て相当驚いていた。まるでおもちゃ箱のような結婚式で、子供たちが本当にいろいろ企画してくれた。ブーケやベール、ドレスにいたるまで。まるで、街で見かけるささやかな祝い事。

そんな式だった。

「わたしも、『へいか、あした結婚式だから楽しみにしててね』って前日の昼間に聞いたんだもん」  
ぷうと頬を膨らませる。

ミリアとジェミニと、彼らの仲間と子供たちの小さな式は大成功で、国の儀式として皇帝の結婚式を執り行おうとしていた大臣たちは後で相当怒っていたらしい。

あの約一年前のドタバタを思い出して、ジェミニは苦笑を零す。

「まあ、楽しかったですし、私としてもあまり待たされずにあなたと結婚できたので幸いでしたが　やっぱり企画しますか」

「ソフィアの体型ならトーマに聞けば手に入るし、企画しちゃうか」

どうして手に入るのかとか、いろいろ気になることはあったが、ジェミニはそこはあえて問わないことにした。

どつやらミリアとトーマは気が合つらしく、よく情報交換をしているという。

につこりほわほわしつつも、基が辛辣な相手を手に入れるにはどうしたらいいのかという。

いかん、顔が緩む。

ジェミニはオーブンからハーブソルトで味付けをしたチキンを取り出した。こんがりと綺麗な焼き目がついており、周囲のじゃがいもやにんじんにもチキンから出た油が染み込んで美味しそうだ。

「さあ、食事にしましょうか」

伝わることのない、ささやかな日常。

それを手に入れるために、語り継がれるような日常を送っていた元皇帝。

きつと、彼女の名前は歴史の流れのままに遠ざかり、人々の口々に上ることも徐々に無くなるだろう。最後の皇帝と呼ばれた少女がいた。そんなふうな歴史上の人物になってしまふだろう。

だけど、きつと誰かが歌い紡ぐだろう。

街の広場で、田舎の首長の家で、厳冬の広間の中で、酒場で楽師たちの美しい調べに乗せて。

伝えられるべき物語は、そして語り継ぎ、歌い紡がれる。

主役の思惑は別として。

物語は旅立つ。

語る人たちの思いをのせて。  
最終皇帝という英雄は、人々に欲せられたまま姿を消したと

幸せなまま。

終

## あとがき

あとがきまでお読みいただきありがとうございます。

全20話にて終了です。

1993年発売のゲームで、私がプレイしたのは確か一年以上は経った後でした。漫画と『もう、大丈夫』の部分だけを含めた同人誌を作成したのが1997年だったと思うので、本当に長い間眠っていたお話しでした。

小説家になろう様で二次創作を発表をするのはかなり悩んだのですが（ふじさわは個人で二次創作サイトを持っております）、誰にも読まれないままよりも、懐かしいと読んでくださる方が一人でもいることを願って掲載いたしました。

かなり、創作部分があります。

そのため、ご不快に思われた方がいらしたら、本当に申し訳ありません。

「ロマンスング サ・ガ2」というゲームは、そういう想像を駆り立てる部分が多いゲームだったと思うんです。

あ、あと、私の書く話にはいつさい「ヘクター」が出てきません。（フリーファイターの男性はちょこっと出てきますが）意外に思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、私の最初のプレイでは彼がまったく役に立たなくて、宮廷魔術士女をすぐに仲間に使っていたんです（^^;）

人それぞれ、ゲームの仕方は違いますので ご了承ください。

では、もしスーパーファミコンがお手元にある方は、ぜひとも「ロマンスング サ・ガ2」をプレイしてみてください。返って、今やってみる方が目新しく感じるかもしれませんので。

お読みいただき、ありがとうございます。

ふじさわ拝

\*\*\*\*\*

2010年12月26日追記

現在、携帯アプリでロマサガ2が配信されているそうです。どもさんのみだそうです。2011年には英雄さんでも配信されるそうです。私はやわらか銀行のためプレイできていないのですが、ご興味のある方はぜひぜひv v

新しくダンジョンが追加されているそうですし、業種（あ、違いますね。部族？ 種族？ 職業？）も忍者とか増えているそうです。いいな。どこかの携帯は持つてるけど、会社支給の携帯なので遊べないのです（T-T）  
気軽に遊べると思うので、一度、挑戦してみただけだったら嬉しいですv v

2011年6月19日追記

ういでも遊べるようです。ヴァーチャルコンソールでダウンロードができます。  
持ってないけど、うい買っちゃおうかな!!!  
まんまスーフアミの状態のようです。  
うい買っちゃおうかな。（かなり気になっているので二度いいました）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4864k/>

---

【ロマサガ2二次創作】 伝えられる物語

2011年9月1日03時29分発行